地質学雑誌　第104巻　第12号（通巻1239号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成10年12月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 News

Vol.1 No.12 December 1998

日本地質学会 *News* Vol.1 No.12 December 1998

The Geological Society of Japan *News* 日本地質学会／〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町1-10-4 丸石ビル 編集委員長 高橋正樹
電話 03-3252-7242 Fax 03-5256-5676 E-mail : geosocjp@ra2.so-net.ne.jp ホームページ http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj/

Contents

博物館紹介⑮ 大鹿村中央構造線博物館 河本和朗……2–3
博物館だより：滋賀県立博物館第6回企画展示「絶滅と進化，動物化石が語る東アジア500万年」……4
賛助会員のページ：株式会社ダイヤコンサルタント……5
地学英語雑感⑩ 略語について 嶋﨑吉彦……6
学協会・研究会報告……7–9
Gondowana-10（第10回国際ゴンドワナ会議）参加報告 吉倉紳一・吉田 勝
アメリカ地質学会1998年総会（トロント）に参加して 山岸宏光
ブルース・チャペル退官記念討論会 On the Bruce Chapell Symposium 石原舜三
寄贈本・紹介依頼本……10
ご案内……10–11
第35回日本水環境学会セミナーのご案内「酸性雨問題の現状と水環境への影響」/Toward a Science of Consiousness－Fundamental Aproaches－（脳と知識に関するTokyo'99国際会議）/第36回理工学における同位元素研究発表会発表論文募集/2003年，国際レルゾライト会議を日本で－ホームページ公開のお知らせ－/「第40回科学技術映像祭」学術研究部門 参加作品募集
公募……11–12
愛媛大学理学部教官の公募について/東京大学地震研究所の教官の公募について/東京大学大学院理学系研究科地球惑星物理学専攻教官公募のお知らせ/大阪市職員（学芸員）募集要綱
1999年地球惑星科学関連学会合同大会……13–15
専門部会コーナー……16
構造地質部会：日韓構造地質研究会第2回合同大会のお知らせ The 2nd. Joint Meeting of Korean and Japanese Structure and Tectonic Research Group, 1st. circular
院生コーナー……17–18
研究室紹介 No.5 金沢大学理学部地球学教室石渡研究室
アメリカの大学院に入学するまで from Penn State（2） 圓入敦仁
支部コーナー……18
北海道支部：北海道支部総会ならびに例会の御案内
The Island Arcだより……19–20
追悼 名誉会員 野田光雄先生のご逝去を悼む 橋本 勇……21
カレンダー……22
第106年学術大会（名古屋）準備委員会ニュース……23
執行委員会だより……23
会費払込ご案内……24

日本地質学会ニュース Vol. 1, No. 1–12 1998総目次……巻末

表紙解説

エトナ火山 バレ・デレ・ボーベ馬蹄形凹地と1991～93年溶岩流

エトナ火山は，イタリアのシシリー島北東部にあるヨーロッパ最大かつ最高の活火山（海抜3,350 m）で，基底の直径は40×50 km，体積は約1,000 km^3である．早くから文明の開けた地中海地域にあって頻繁に噴火していたので，BC693年以来約150回の噴火が記録されている．

山頂の東側には，直径6 km，深さ300 mの東に開いた馬蹄形凹地バレ・デレ・ボーベValle del Boveがある．原型は約10万年前にできたらしいが，成因には巨大地滑り説とカルデラ説があり，決着がついていない．この写真は凹地南壁上のザコラーロZaccolaro展望台（海抜1,760 m）から西北西に山頂方向をみたものである．スカイラインで白煙をあげているのが，エトナ火山最高点の中央クレーターと南西クレーター，そこから手前のバレ・デレ・ボーベ凹地崖を流下しているのが1978年～90年の溶岩流である．

バレ・デレ・ボーベ凹地内でも18世紀以来約20回の噴火が起きており，そのうち最大のものは1991～93年の溶岩流出である．写真中央やや左の凹地崖の黒い部分がその噴出口（海抜2,300 m）で，噴火は473日続き，写真手前のように凹地南側の8 km^2を平均厚さ40 mの溶岩流で覆い，総噴出量は0.3 km^3であった．この噴火規模は，エトナ火山1614～24年の大噴火以来，最大のものとなった．

この噴火では溶岩流が山麓の町ザフェラーナZafferanaを襲う可能性があった．主流路上流にあった海抜2000 m付近の溶岩トンネルを爆弾で破壊し，流路をバレ・デレ・ボーベ凹地内に分散・蓄積させることによってザフェラーナの町は助かった．その意味では，この写真の溶岩原は人為的にコントロールされたものといえる．

（写真・解説：白尾元理 写真撮影は1998年6月23日）

表紙デザイン：渡部芳夫 レイアウト：村松雅子

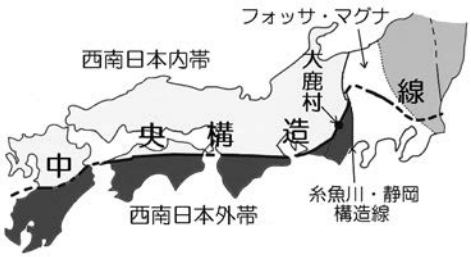
博物館の建物と岩石園の一部，後方は鹿塩マイロナイトの大露頭．

大鹿村中央構造線博物館

Osika Geological Museum of Japan Median Tectonic Line

大鹿村中央構造線博物館　学芸担当員　河本和朗

長野県南部，南アルプス地域では，中央構造線の破砕帯が深く侵食され，一直線に続く鋭いV字谷になっています．赤石・関東屈曲構造の西半部にあたる当地域では，中央構造線はほぼ南北の走向をもち，東の外帯側の赤石山脈と，西の内帯側の伊那山脈との境界となっています．



下伊那郡大鹿（おおしか）村は，この，南アルプスの中央構造線ぞいの村です．おもに三波川帯の地すべり性斜面を利用して古くから開け，長野県に現存する最古の木造建築物である福徳寺があります．天竜川が流れ，JR飯田線や中央自動車道が通る伊那谷とは，標高1,700ｍほどの伊那山脈でへだてられています．近年は過疎化が進み，村の現在の人口はおよそ1,500人です．

大鹿村は明治時代に作られた村名で，平安～江戸期には大河原（おおかわら）村と鹿塩（かしお）村という2つの村でした．地質関係の方には，領家帯の中央構造線ぞいに露出する鹿塩マイロナイト（鹿塩片麻岩）や，中央構造線の最初の活動期として提唱された鹿塩時階など，「鹿塩」という名の方がなじみ深いかもしれません．

現地現物主義の博物館

この大鹿村大河原に1993年8月，村立の大鹿村中央構造線博物館が開館しました．

建物は中央構造線のほぼ真上に建てられています．館がある場所は付近の集落や水田とともに小渋川の氾濫原で，中央構造線は厚さ20ｍの河床れきに覆われています．

けれども博物館の前庭からは，館の南北2か所の中央構造線断層鞍部を遠望できます．その前庭に，村内の河川からクレーンで吊り出した大型岩石標本を175点，じっさいの地質配列を模して配置しました．

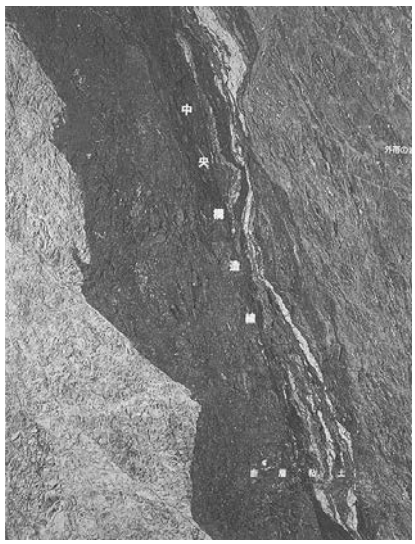
隆起と削剥がともに激しい大鹿地域では，村内に露出している岩石はすべて，日本列島の基盤岩です．それも，赤石山脈主稜線の四万十帯，中腹の秩父帯，山麓の三波川帯，伊那山脈側の領家帯と，4列の地質帯が大鹿村一村の中に並んでいます．

館内には，村内産岩石の切断研磨標本を

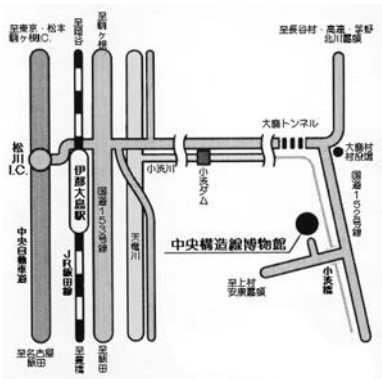
岩石園に引かれた白線をたどると中央構造線断層鞍部を示す．左：領家帯，右：三波川帯．

200点あまり展示しています．また，大鹿地域の赤石～伊那山脈の精密な1万分の1地形地質模型があります．

館内の重要な展示物として，村内北部，北川地区の鹿塩川ぞいの川岸に露出している中央構造線露頭をそのまま掘り取った，2.5ｍ×3.5ｍの剥ぎ取り標本があります．

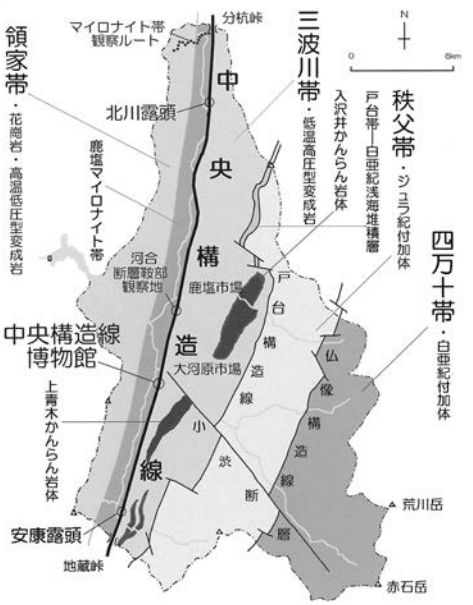


北川露頭はぎとり標本中心部の説明．左：領家帯マイロナイト源変質カタクレーサイト，右：三波川帯結晶片岩源カタクレーサイト，中央：断層ガウジ．写真幅1.5ｍ．領家帯マイロナイト源変質カタクレーサイトとの境界近傍のガウジから12.4MaのK–Ar年代が得られているが，これは同岩を変質させた熱水上昇によるリセットの年代を示す．これらの構造を，東（右）から西（左）へ衝上する多数の中～低角逆断層が切っている．ガウジ帯の内部に，すべての構造を一直線に切る断層面（「中央構造線」の文字ぞい）があり，最新の活動によるものと考えられる．



大鹿村中央構造線博物館
〒399–3502　長野県下伊那郡大鹿村大河原988
月火曜日休館（4–11月の休日は開館），￥500
開館　9：30–16：30，電話　0265–39–2205
URL“http://www.iidanet.or.jp/~kozosen”

大鹿村の地質



大鹿村全域が博物館

博物館の展示だけでも十分見ごたえがありますが，「大鹿村の東西15 km・南北25 kmの全域が博物館」と考えています．

東西方向には，四万十帯から領家帯にいたる地質を連続的に観察できます．博物館がある大河原からは，小渋（こしぶ）断層の谷どおしに，正面に赤石岳を望めます．

北端の分杭（ぶんくい）峠付近から内帯側へ伸びる高森山林道では，領家帯側から中央構造線に近づくにしたがい，花崗岩類・ミグマタイト・片麻岩から，マイロナイトへ変化し，中央構造線近傍ではカタクレーサイトの重複変形を受けた様子を観察できます．そのため「鹿塩マイロナイト観察路」とし，道路状況が良い6月から11月まで，林道ぞいの露頭に岩石名を記したネームプレートを取り付けています．

鹿塩マイロナイト帯観察路を訪れた，アメリカ合衆国地質調査所の，S．ヒックマンさん（左），D．ロックナーさん（右）．

南北25 kmには，北端の分杭（ぶんくい）峠から南端の地蔵峠へ，中央構造線が縦断しています．伊那山脈稜線から中央構造線付近の河床まで，標高差1,000 mにたっする一直線の断層線谷は，地蔵峠や赤石山脈斜面側の一部の集落から展望できます．

中央構造線断層線谷の巡検風景．右前方は昭和36年豪雨による大西山大規模山麓崩壊地．

中央構造線の断層面が東傾斜であるため，川の侵食量が大きくなるにしたがい，中央構造線は赤石山脈側に離れていきます．

尾根を中央構造線が横断するところは，鞍部地形ができ，一直線上に並ぶ断層鞍部列になっています．河合（かわい）地区の断層鞍部に解説板を立てました．

河合の中央構造線断層鞍部解説板と，鹿塩市場神社の御柱祭り里曳き（1998.4）

大鹿村内北端の分杭峠に近い北川（きたがわ）と南端の地蔵峠に近い安康（あんこう）の2か所の露頭は，定期的に手をいれて観察しやすいようにしています．ともに国道152号から歩いて2分ほどの川岸に出ています．ただし国道とはいえ，大型バスは通行できません．北川露頭は，国道ぞいに駐車場を造り，歩道を整備してあります．安康露頭は私有地のため歩道や案内板を改良できず，国道からの入口が分かりにくいので博物館に問い合わせて下さい．

北川露頭の整備．現在は上部の旧河床れき層が取り除かれ，断層水平断面も見られる．

露頭整備

断層露頭は，冬季に凍結した表層が春先に融解する時に剥離し露頭を覆うため，なるべく年に1度はクリーニングしています．

北川露頭は，高さ7 mの基盤岩を不整合に覆う厚さ3 mの旧河床れきが，しだいにオーバーハングになり，危険になりました．そこで1997年12月，旧河床れきを取り除く工事を行いました．その結果，中央構造線の水平断面も見られるようになりました．いままでの崖の面と合わせ，走向と傾斜の両方を観察できます．ただし上面は強く風化しています．やがて草も生えてくるでしょう．のり面保護と露頭観察とはなかなか両立せず，むずかしい問題です．

北川露頭で見られる中央構造線の水平断面．左：赤石山脈側・三波川帯，右：伊那山脈側・領家帯，中央人物のところが中央構造線．破砕帯ぞいに鹿塩川が侵食している．

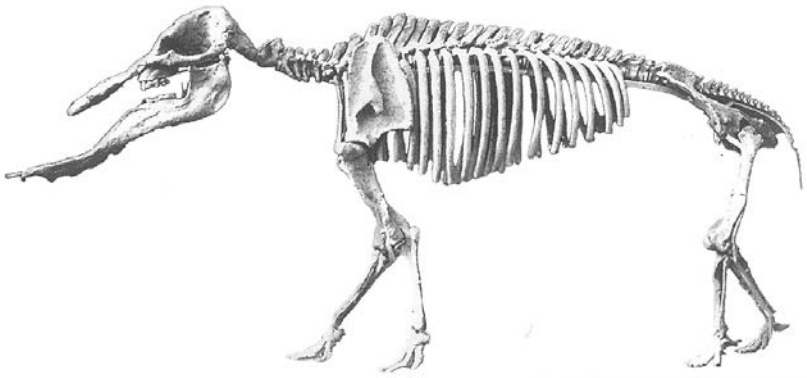
地質・地盤変動・地形・集落

大鹿村では，内外帯で対照的な地形が見られます．固くてもろいマイロナイト帯は急峻な斜面となり，崩壊性の地形が発達しています．昭和36年伊那谷集中豪雨のときには，大西山山腹が大規模に崩壊しました．

三波川帯は地すべりが多く発生し，山腹に緩斜面をつくっています．南向きの地すべり跡地は，洪水に対して安全で，土壌と水と日射にめぐまれ，古くから集落が発達しています．

館内の1万分の1精密地形地質模型で，地質と地形の関係を，ご検討ください．

三波川帯の地すべり跡に立地する上蔵（わぞう）集落．長野県現存の最古の木造建築，福徳寺（平安末～鎌倉初期建立）がある．



下顎がシャベル状のプラチベロドンゾウ *Platybelodon grangeri*

滋賀県立博物館第6回企画展示
「絶滅と進化，動物化石が語る東アジア500万年」

500万年は，地球の46億年の歴史から見ればわずか1000分の1，ほんの一瞬のできごとともいえるものです．

しかし，最近500万年は，地球上のそれまでのどの500万年よりも，少なくとも私たちにとっては意義のある時代です．それは，現在私たちが知る限り，今からおよそ500万年前に，最古の人類であるアウストラピテクスがアフリカで誕生し，この500万年間は，私たち「ヒト」の適応と放散の時代だからです．

琵琶湖博物館のテーマである琵琶湖は，ほぼ400万年前に現在の三重県上野盆地に誕生し，断層の形成，陥没・隆起を繰り返しながら北上し，現在の位置にやってきました．この過程において，新しい生物も琵琶湖の中で生まれてきました．

今回の企画展では，琵琶湖周辺で発見される脊椎動物化石を，もう少し広い視野で考えてみることにしました．すなわち，東アジア全体の中で琵琶湖周辺を考えようというわけです．博物館では現在さまざまな研究を行っていますが，これはその一つの「東アジアの中の琵琶湖，その成立と人間生態系に関する総合研究」のうち，特に脊椎動物化石に関するものの中間成果でもあります．たくさんの方々の来館をお待ちしております．

会期：1999年1月15日（祝）～4月11日（日）

場所：滋賀県立琵琶湖博物館　企画展示室

観覧料：大人900円（700円），大学・高校生700円（550円），小・中学生450円（350円）

（　）内は20名以上の団体料金です．常設展もご覧いただけます．

［展示の紹介］

●導入部　今回の企画展示では，全体を本のページを1枚1枚めくるような感じで，説明する演出をしていますが，最初の入口も立てかけた大型の本の中をくぐって入ります．入ると，そこはある学芸員の研究室の机が大きな写真として引き伸ばされています．その机の上には，古琵琶湖層から発見されたゾウの臼歯化石が置かれています．この琵琶湖地域から発見された化石をどのように研究して，なにがわかっていくのかが展示を進むにしたがって明らかになっていきます．

●主展示　導入展示をぬけると，右手の壁面展示ケース内には，「現在の日本の哺乳動物たち」「何度も入れかわった動物たち」「日本列島で絶滅した動物たち」「進化の多様性」「動物化石が語る東アジア500万年」などの展示がパネルや現生骨格，化石骨格などを使って説明されます．そして，現在の日本の動物相が，この500万年間に絶滅や進化を繰り返しながら，何度も入れ代わりながらできあがったことが示されます．

展示室中央には，本から抜け出したように中国の中新世から後期更新世の哺乳類化石約70点が展示されています．これらは，北京自然博物館の協力を得て展示されたもので，ほとんどが日本初公開のものです．これらの中には，中新世のシャベル状切歯をもっていたプラチベロドンゾウ，鮮新世の首の短いキリンの仲間のシャンシテリウムやシノマストドンゾウ，キロテリウムサイ，更新世の大型のホラアナクマやマンモスゾウなどの組立骨格9点のほか，さまざまな大型哺乳類の頭骨が展示されます．

●ワークショップ　大きな展示室を抜けると，「どこで，どのようにして化石が発見されるのか」「どのように発掘するのか」など，来館者の知りたいことがわかる展示がされています．また，そこでは実際のクリーニングのようすが見学できたり，ワークショップも用意されています．

［本の紹介］

企画展示に関連して中国で『中国古動物』が刊行されました．内容は，中国の脊椎動物化石を中心に古生代の無脊椎動物も含めて豊富な写真と中国語，英語，日本語の説明がついています．この版は，この企画展示のために特別に印刷されたものなので，琵琶湖博物館のショップのほかには，下記の書店以外では購入できません．ぜひ，この機会にご購入することをお勧めいたします．

『中国古動物』

関　鍵　編著　高橋啓一日本語監訳，197ページ，ハードカバー，オールカラー　価格9,800円

購入先：

・琵琶湖博物館ミュージアムショップ
〒525–0001　草津市下物町1091　電話 077–568–4846

・亜東書店
〒101　東京都千代田区神田錦町1–4
日中友好会館内　電話 03–3291–9731

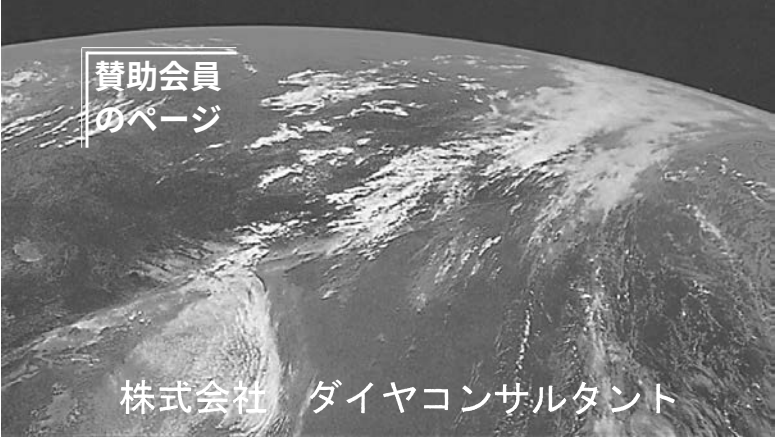
・自然書房
〒397–0302　長野県木曽郡開田村西野4617　電話 0264–44–1121

〔交通案内〕

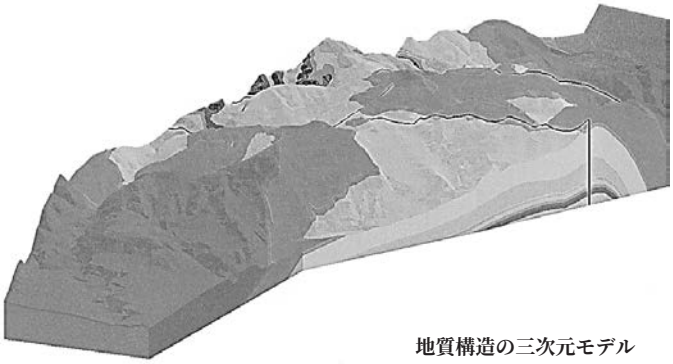
・JR新幹線「京都駅」「米原駅」からJR琵琶湖線に乗り換え．
「草津駅」「栗東駅」「守山駅」で下車．
バスでは，JR草津駅西口発で近江鉄道バス「烏丸半島」行き，「琵琶湖博物館前」下車．（約22分）
タクシーでは，JR草津駅西口から20分，栗東駅西口から約15分，守山駅西口から20分．

・お車では，名神高速道路「栗東IC」から国道1号線～栗東志郡中線～湖岸道路を経て烏丸半島へ．（バス，マイカー駐車場あります．）

・航路では琵琶湖汽船シャトルボートで「大津港」より「草津烏丸半島港」へ．



株式会社　ダイヤコンサルタント



地質構造の三次元モデル

株式会社ダイヤコンサルタントは，土木・建設，防災，地下資源などのさまざまな分野で，高度な経験と訓練をつんだ技術者による専門的なサービスを提供し，社会に貢献することを目的として，昭和38年5月15日に設立されました．

当社は平成10年5月に創立35周年を迎えました．これまでの着実な努力によって，現在では完成高約150億円，社員数約600名程度を擁する我が国有数の建設総合コンサルタントに成長することができました．当社はマスタープランの企画から調査，解析，設計，施工管理さらに健全度評価にいたるまで，常に多角的な視野で業務を実施していますが，ここでは特に地質調査分野でのトピックスをいくつか紹介いたします．

活断層調査

1995年1月17日未明に起こった阪神淡路大震災は，きしくも「活断層」なる言葉を一般に知らしめる結果となりました．当社は，20年以上も前から活断層の調査を実施してきており，活断層調査に係わるノウハウは業界トップクラスであると自負しております．単に調査を行うだけでなく，耐震設計に代表される「活断層の工学的評価」を行うことにより地質学と建設工学の橋渡しをしてきました．

活断層調査は言うまでもなく，文献調査，空中写真判読，地質踏査など地道な調査が不可欠です．これらに加え状況に応じて，群列ボーリング調査，トレンチ調査，浅層反射法あるいは比抵抗法探査など，種々の調査法を組み合わせて，断層の性状を調査します．さらに当社では，三次元の地形・地質情報解析を含めて，活動周期や地震規模などの活断層の諸性状を検討し，耐震設計や防災計画策定などの防災対策に精度の高い情報を提供しています．

地質データの三次元処理

地質調査では地表踏査，ボーリング調査などから，場合によっては物理探査などの結果を加味して地質技術者が二次元の断面図を何枚も描き，総合的に判断し地質構造を推定している場合が多いと思います．ところが，交差する地質断面図同士の整合性はとれていても，隣接する断面図間で地層にねじれが生じたり，尖滅する地層や不整合などの扱いが曖昧になることがよくあります．

当社では，地質構造の解釈の品質を高めるため，三次元地形・地質モデリング/マッピングシステム「VU L CAN」*を国内でいち早く導入し，地質技術者の解析支援システムとして運用しています．

地表露頭，ボーリング，物理探査など地質調査に係わるあらゆるデータを入力し，コンピュータグラフィックス上で地質構造の三次元モデルを作成します．もちろん，データでは足りない部分，たとえば断層の延長方向や変位量などは，地質技術者の判断を反映させて矛盾の少ない地質モデルを構築することができます．さらに，このような三次元データの処理を進めることによって，モデルに異常な曲率の変化や系統的な屈曲が出現することがあります．これらの異常な屈曲の原因が，たとえば断層や不整合によるものなのか，そもそも地層の対比が間違っているのかといった問題が白日のもとにさらされ，結果として解釈の精度向上に貢献しています．

三次元処理のもう一つの利点は結果をそのままプレゼンテーションに利用できることです．さまざまな視点でみた鳥瞰図やビデオへの録画により，地質技術者以外の方にも，視覚的に理解してもらうことができます．

明日のダイヤコンサルタント

今まさに，三次元応力解析，三次元地下水流動解析，三次元液状化解析などの高度な数値解析が行われていますが，解析の基礎となる地質解析が，旧態然とした二次元解析では精度の向上が望めません．これからの地質技術者は三次元地質構造解析支援ソフトを用いた地質解釈を積極的に押し進める事が重要です．そして精緻な三次元地質情報をベースにしたGISによる設計支援が日常的に行われる時代がすぐそこまで来ていると考えています．

（東京事業部　高野　仁，丹羽　茂）

会社概要

社　名　株式会社ダイヤコンサルタント
代表者　代表取締役社長　松枝　露
資本金　4億5千500万円
売上高　146億円（平成9年度）
従業員　647名
内　理学博士：5名
工学博士：11名
技術士：103名（のべ人数）
RCCM：136名（のべ人数）
情報処理技術者：5名
土木施工管理技士：119名
測量士・測量士補：145名
環境計量士：4名
1級建築士：2名
地質調査技士：57名
地すべり防止工事士：33名
本　社　〒171-0014 東京都豊島区池袋3-1-2
ホームページ：http://www.diaconsult.co.jp
e-mail : info@diaconsult.co.jp

*VULCANは豪州MAPTEK社製のソフトウエアです．

活断層のトレンチ調査

「活断層シリーズ」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

地学英語雑感⑩　略語について

嶋﨑吉彦

これまでセンテンスとかパラグラフとか，英語の文章の基本的な構成要素について述べてきたが，これからは比較的細かいことではあっても重要で，日本語と根本的に異なる問題について考えてみたいと思う．略語はその一つであろう．

日本語では漢字を使うので，非常に便利な略語を作る．○○高等学校を「○高」と略したり，科学技術庁を「科技庁」と書いたりいったりする類である．また単位についても，略すことが多く，センチメートルをセンチ，キログラムやキロメートルをキロなどと普通にいう．しかし原子力発電所を「原発」と非公式にはいうけれども，我々は論文や報告書のような公的な文章では，あまり略語を使わない方ではなかろうか．

これに反して，欧米の言葉では，桁違いに多くの略語を使っているように思われる．何せ公的文書に人名すら頭文字で略する言語である．地名をはじめ多くの固有名詞には正式に決まった略語があり，知らないと全く判読できなく一覧表をひもどくしか手はない．また科学用語にも，abstractをabsやgeologyをgeol位は理解できるが，vacuumをvacだのdiluteをdilなどとなると我々地学屋は通常理解不能になる．この膨大な決まった略語や記号を“Suggestions”では10ページ以上にわたって表示している．したがって，これを議論し始めると容易ではないので，ここでは，我々地学関係者が通常使わざるを得ないと思われる英語の略語の用法について述べてみよう．

以下述べる中で，数値を伴う単位の略語の後のピリオドは勿論打たないが，単位以外の略語，例えば，午前・午後のam，pmなども打たない方が良いのではないか，混乱が少ない，と筆者は思っている．この点は，USGSを含む一般の方式とは異なるのでお断りしておく，ご了承下さい．これは，出版物の編集者がそれぞれ決めれば良いことと思うが，色々とご意見があると思うので伺いたいところである．

1.　度量衡などの単位

我々が日常最も多く使っている英語（ローマ字）の略語の一つは長さ，重さ，などいわゆる度量衡などの単位であろう．したがって，我々は使いなれてはいるが，文章中にキチンと書くときに，戸惑うこともあるかと思うので，これについて少し述べる．

大文字か否かで多少気になることがあるが，かつて物事が単純であった頃は，原則として人名から採った単位の略語は大文字，人名以外の単位の略語は小文字と考えれば良かった．例えばアンペア，ボルト，ワットなどは人名であるからその略語は大文字，ミリ，センチ，キロ，メートルなどは小文字で，“10 V，10 kV，10 A，10 mA，100 kWh，100 kWe，15cm”などと書く．しかし現在では，メガやギガなどがごく普通に使われ，この略語を小文字にするとミリやグラムと区別ができないために，百万，十億を表すM，Gの大文字が用いられるようになった．したがって，必ずしも上の原則は成り立たないが，多くの場合はこれを基礎に考えて良いと思う．さらに，混乱することは殆どないが，同じ文字を使って違う単位を示すことがある．例としては，ミリを接頭字として使うときは“m”であり，メーターも勿論“m”である．

次に，本文中にアラビア数字を伴った単位は略語を使うべきであり，その後にピリオドを打たないのは常識であろう．ただしアラビア数字を使わないときは，単位も略語を使わない．例：“Several meters long, a few kilograms in weight”．またセンテンスの初めに持ってくる場合は，アラビア数字を使わないので単位も略さない方が良い．例：“Thirty thousand five hundred twenty tons of ore was produced in 1995 and 34,560 t in 1996.”しかしこのような用法はできるだけ避けて，“The ore production was 30,520 t in 1995 and 34,560 t in 1996”と書いた方がはるかに読みやすい．

また英語の単位の略しかたについては，妙な用法・慣習があるようで，正式には数値を伴った単位を形容詞的に用い，その単位がイギリス単位である時は，略さないという．“Suggestions, ed. 5”に出ている例：“10-pound weight, 1/2-inch pipe, 30-foot well”ただし“10-m well”．最近でも我々が使う可能性の高いイギリス単位は，海洋のマイルであろう．マイルの略はmiで，海里の略はnmiであるが，確かにmileと書いていることが多いように見える．しかし筆者はこれを気にしないで，lb，in，ft，miなどを使おうと思っている．これを問題にしていない英語国人も少なくないようであるが，前出の“Suggestions ed.5”ではこの用法をUSGSの連中に薦めていることは知っておいても良いであろう．

2.　時間，日時，年数

時間の単位の略語は；時，分，秒，はh，min，s，が正式である．秒をsecと書くことがあり充分通用するが，これは，secant，やsection，の略に使われており，認められたものではない．もっともminはminimumの略語でもあるから，同じ略語で異なる意味を持つのは避けがたいことではあろう．

月の略語は，Jan., Feb.などいうまでもないが，これも表など以外に本文中では，略さない方が良いようである．

午前，午後は数値を入れて，小文字でam，pmと書くことは今さらここでいうまでもないが，2：00 pmではあるが，14：00 pmとは書かない．24時間単位の場合は，14：00 hours（hr）と書く．ただしUSGSでは24時間単位を薦めておらず，“hr”の略語も認めていないことを付言しておく．また12 mは正午であり，12 pmは日本流の午前零時である．この“m”はmeridiemで正午の意味である．さらに，USGSも多くの辞書もa.m., p.m.とピリオドを付けることを指示している．またam，pmを単独で午前・午後を示すためには，使わない．

西暦紀元前をBC,紀元後をADと記すが，この場合BCは年の後に，ADは前に書くのが正しい．180 BC, AD 165．これは，180 before Christであり，一方は，“anno Domini”（in the year of our Lord）165の略である．しかしADを後に書く人は英語国人にも結構いることは事実である．また，A.D., B.C.,と全部ピリオドを打つように指示している文書が多い．

地質の年数については二種類あって，現在を基準にしたものと，地質時代の間のものがある．現在までの年数は百万年を単位のMaと一年単位のBPがあることは，言うまでもない．一方地質時代の間は，百万年単位のmyで記す．例えばジュラ紀は205 Maから135 Maまでの間だが，その長さは70myである．現在地学で年数の略として用いられているのは：年代用として，kaがkilo-annumで千年，Maがmega-annumで百万年，Gaがgiga-annumで10億年の三種；さらに期間用として，myのmillion yearsとbyのbillion yearsの二種類と考えて良いであろう．これもUSGS方式では，10,000 B.P., 70 m.y.,しかし205 Maにはピリオドなし．

3.　方位

方位に数値を入れないで，本文中に書くときはスペルアウトして略字を使わなく，数値を伴うときは略する．“Sendai is north-northeast of Tokyo. The dip is 15° NE. The strike is N30°15′W．しかしThe dip is northeast.”．“Suggestions”では例外について言及していないが，この問題は，文中に色々な方位を記述する必要があり，例えば「南南東−北北西方向に伸びている云々」というような表現がしばしばでてくるときは，SSE−NNWの方が，はるかに理解し易いので，筆者は余りこれにとらわれなくても良いと思っている．しかし出版物の編集者が強い意見を持っているときは，勿論これに従う必要があろう．

緯度・経度については，以前に少し述べたが，数値を伴っているときは“latitude, longitude”を略して“lat 35°30′N, long 104°50′E”のように記述する．この“lat, long”の後にはUSGS方式でもピリオドを打たないように指示している，多分数値を伴う単位とみなしているのであろう．しかし多くの辞書では打っている．“Suggestions”では東西南北の略の後には，N., NW., SSE.,のように必ずピリオドを打つよう強調している．

略語はあくまで便宜と理解しやすさのために使うものであるから，理解し難いような時は使うことはなく，柔軟に考えて良いと思う．次回も略語や記号等を中心に述べて見たいと思っている．

Gondwana-10（第10回国際ゴンドワナ会議）参加報告

第10回ゴンドワナ国際会議は，南アフリカ共和国のケープタウン大学（UCT）を会場に，1998年6月28日から7月4日の7日間にわたって催された（参加登録者総数は約300名）．本会議はInternational Commision on Stratigraphy傘下のSubcommision on Gondwana Stratigraphyが，地質学のさまざまな分野の専門家の国際協力によって，ゴンドワナの地質学的発展を解明するために，ほぼ4年に一度開催するものである．

今回の全体テーマは“Event Stratigraphy of Gondwana”で，そのねらいは世界各地に分布するゴンドワナ大陸片に記録されているゴンドワナの生成・発展の歴史，および，その環境や生物の変遷に関与した事変の研究成果を共有し，研究者間の協力をより緊密にして，新たな地平を切り開くことにあった．

28日は17：00～20：00に参加登録と“Icebreaker”（懇親会）が催され，各国の参加者はグラス片手に旧交を温め合った．29日は開会式の後，9：00からAlex DuToitシンポジウムが開催された．これは，1997年が大陸移動やゴンドワナについて述べた彼の著作「Our Wondering Continents」出版60周年に当たることを記念して，キーノートスピーカーが各専門分野におけるゴンドワナ研究の最前線を紹介することを目的に企画されたものである．M. De Wit（UCT）の趣旨説明に続いて，A. Fuller（UCT）が“Who was Alex du Toit？”と題して，1900年代初頭の交通不便な南アフリカで，徒歩と自転車500,000平方マイルにおよぶ地域の詳細な地質図を作った苦労，大陸移動説を主張した先見性，趣味（クラリネット演奏）などを紹介した．これによって，論文や著作からは知り得ない彼の人物像が具体的になり親しみを覚えた．その後，P. Hoffmanによる講演「Birth of Gondwana」を皮切りに，総勢14人のキーノートスピーカーの講演が18：00近くまで行われた．夕食後の19：00からは“Gondwana Indaba/Debate”が開催された（Indabaとは現地住民のズールー語でmeetingの意味）．これは，あらかじめ配布されていた用紙に記された質問内容を司会者が読み上げ，壇上のキーノートスピーカーがそれに答え，会場の参加者と議論するという形式で進められた．キーノートスピーカーの中には夕食時のワインやビールのグラスを手に登壇する者もあり，和やかな雰囲気の中で活発な議論が，21：30に宿舎へのバスが会場を後にするまで続いた．

翌日からGondwana FaunaⅠ・Ⅱ・Ⅲ，Gondwana FloraⅠ・Ⅱ，Gondwana Climates，Gondwana Geomorphologyをテーマとする第一会場と，Birth of GondwanaⅠ・Ⅱ・Ⅲ，Gondwana Magmatism and Breakup，Gondwana Reconstructions，Gondwana Plaeomagnetism，Gondwana Periferal Tectonics/SuspectTerranes，Gondwana Internal Tectonics/Basinsをテーマとする第二会場に別れて個人講演が行われた．以下に，筆者らが参加した第一会場の講演の様子を中心に報告する．

6月30日の第一会場は終日，BIRTH OF GONDWANA（IGCP–368の協力セッション）の大セッションにあてられ，32の講演が行われた．また，その他全体で68のポスター発表もあった．冒頭論文のC. ScotteseによるA tale of two supercontinents : the assembly of Rodinia, its break–up, and the formation of Pannotia during thePan-African eventsは，多くのデータをコンピュータ処理した見事な画像で750 Ma～550 Maのロディニア分裂からパンノチア形成にわたるプレートテクトニクスと地形変化を示し，パンノチア超大陸のパンアフリカ変動による出現を強調するとともに，パンアフリカ変動によって出現した巨大山脈がベンディアン氷期の元凶であることを強調した．引き続いて，P.A. Cawoodらは北米北東岸地域（Iapetus）でリフト開始期を示す火成活動が550.5＋3/－2 Maであることを報告し，パンノチアの短命存在の可能性を示した．吉田の講演はElectron microprobe monazite ages from South Indian granulitesで，モナザイトのコアに残された古い年代の意味を議論した．同日の夜にはGondwana Graphics－Computer/Video/Poster Sessionがあり，11億年間のゴンドワナの分裂−再構成，古気候や古地理の変遷などを可視化したビデオ4本を紹介したC. Scoteseの独壇場となった．

7月1日には4コースの日帰りMid-Conference Field Tripがあった．筆者らが参加した第一コースのGeology of the Cape Peninsulaは2台の大型バスに分乗して，ゴンドワナ地質事変を記録したケープ半島の地質を見学した．この巡検のハイライトは喜望峰とChapmans Peak Driveであった．当日は時折冷たい雨が降るあいにくの天気であったが，参加者の多くが喜望峰に立ちたいという希望をかなえることができた．Chapmans Peak Driveはケープ半島西海岸の断崖絶壁につくられた道路で，それに沿って露出する540 MaのCape Graniteと，これを不整合に覆う砂岩，シルト岩，泥岩，礫岩などからなる下部オルドビス系のGraafwater Formationは見ごたえがあった（写真）．Graafwater Formationは赤色の泥岩やシルト岩と白色の砂岩のコントラストが印象的な河川−浅海域の堆積物で，堆積環境を示すさまざまな構造がたいへんよく保存されており，ついカメラのシャッターを切る回数も多くなった．

6月2日の第一会場では3つのセッションがあった．GONDWANA MAGMATISM AND BREAKUPのセッションでは8講演があった．その多くが中生代のゴンドワナの大分裂に関係する玄武岩活動とマントル上昇流（ホットスポット/プルーム）に関するテクトニクスあるいは岩石学的解析であった．異色はC.J. Hattonの講演で，南アフリカのGroup 2キンバーライトが，パンゲア分裂時のトリスタンホットスポット活動と，当時その上部に移動して来た南アフリカの厚い大陸地殻下部との相互作用の産物であるとする考えを示した．

GONDWANA RECONSTRUCTIONのセッションでは11の講演があった．主に古生代～中生代地質からのゴンドワナ復元に関する研究が多かったが，次に述べる2講演は先カンブリア代であった．M.J. DeWitらはマダガスカル南部の原生代剪断帯の特徴をまとめ，インド半島南部の原生代剪断帯との対比を試み，VorokafortaとAchankovil剪断帯を

Chapmans Peak Driveに沿って露出する540 MaのCape Graniteと，これを不整合に覆う下部オルドビス系のGraafwater Formation

対比した．これらのいずれの剪断帯でも，早期（660～620 Ma）と後期（600～520 Ma）の変成事件が読み取れるという．R. J. Thomasらは，フォークランド初頭のメレディス岬周辺に分布する変成岩類の年代測定結果を得て，それらが南アフリカのナタール帯とよく合致することを示した．これは彼らが最近数年間強調してきたこの両地域の対比を強く支持している．

GONDWANA PALEOMAGNETISMのセッションでは8講演があった．これらはほとんどすべてが古生代～中生代が関係する研究で，ゴンドワナやその陸片から得られた古磁極軌跡か，あるいは古地磁気層序であった．そのなかで興味深かったのは，Rapaliniによる南米南西部異地性の古生代テレーンの研究で，ペルー，アルゼンチン，チリーにまたがる5つのブロックについて，最近の古地磁気学的，地質学的研究をレビューし，それらが古生代を通じてゴンドワナの西南縁に付加した準異地性或いは異地性地殻であることを強調した．また，L. S. Bettucci & A. E. Rapaliniらは，南米Rio de Plataクラトンのネオ原生代の古磁極軌跡を示し，750～550 MaのAPW Pathから，同クラトンの移動を論じ，550～560 Maにはゴンドワナと一体になったとした．

7月3日には2つのセッションが持たれた．GONDWANA'S PERIFERAL TECTONICS ANDSUSPECT TERRAINSのセッションでは9題の講演があり，主に古生代～中生代のゴンドワナ縁辺域の研究であった．場所としてはゴンドワナの古太平洋縁辺地域（チリ西岸および南極−オーストラリア東部）が多く，この時代のゴンドワナの古太平洋縁辺は一般的に収束帯であり，収束帯特有のテクトニクスや変成帯の発達が報告された．一方，興味深かったのはB. D. Erdtmanの報告で，西ゴンドワナの南西縁～北縁に分布するアレキパ，アバロニア，イベリア等十数ケの小テレーンテクトニクスを論じ，現在の中～東ヨーロッパーにもゴンドワナ陸片が多数存在することを強調した．残念であったのは，同じ縁辺部でありながら東アジアからの報告が無かったことで，ゴンドワナの縁辺陸片としての権利主張をヨーロッパにしてやられた感じであった．

GONDWANA'S INTERNAL TECTONICS AND BASINS大セッションのLOWER PALEOZOIC BASIN EVOLUTION, SOUTHERNMOST GONDWANA MARGINのセッションでは8題の講演があった．ゴンドワナ各地の下部～中部カンブリア紀堆積物のハイマートや，ロス変動テクトニクスとの直接の関係などが論じられた．例えばC. S. Adamsは，石灰質堆積岩のストロンチウム同位体初生値や，グレイワッケ中の砕屑性ジルコンの年代から，ニュージーランド南島西部の古生代堆積物の起源が北オーストラリアおよび南中国であると指摘した．K. Burkeは北アフリカからアラビアにかけて分布する初期古生代砂岩層を，パンアフリカ変動との関連で検討することの重要性を強調した．異色はI. S. Buickで，中央オーストラリアのアルンタ変成帯中部のグラニュライトのSHRIMP年代から，それらの原岩は600～700 Maより若く，グラニュライト変成作用はジルコンのovergrowth rim年代の460 Maであるとし，従来，中期原生代とされたアルンタブロックの変成作用の見直しを迫った．GONDWANA BASIN EVOLUTION : STRATIGRAPHY, DEFORMATION AND FLUIDSのセッションでは16の講演があった．ここではゴンドワナ系堆積盆の発達が，ゴンドワナ超大陸分裂テクトニクスにどのように支配されているかが興味の中心であった（例えばA. Wanke et al.やJ. Peters & S. K. Singh）．

7月4日の最終日は大会のまとめと討論の会（Gondwana : SIYA PHI?）が，ほぼ3時間にわたって行われた．C. Scoteseによる What we really don't know about the plate tectonic, palaeogeographic, palaeoclimatic and biogeographic history of Gondwanaと題する総括の講演と，それに続くキーノートスピーカーの意見表明を受けて，これからのゴンドワ研究の方向が議論された．印象的であったことの一つは，10億年前の超大陸ロディニアにいて多くの疑問が出されたこと，超大陸の分裂テクトニクスや再構成における堆積盆解析の重要性が示されたことである．また，今後のゴンドワナを含めた超大陸の離合-集散や環境変遷の研究には，東南アジアから中国・ロシアを含む領域の精度の高い情報が不可欠であるとする意見が多く聞かれたことであった．この点で，現在，4年目を迎える吉田　勝が提案し，コリーダーをつとめるIGCP−368「Proterozoic Events in East Gondwana」とともに，1998年から始まった波田重熙氏（神戸大学）をリーダーとするIGCP−411「Geodynamics of the Gondwanaland derived terranes in east and south Asia」など，日本人研究者のリーダーシップで進められているプロジェクトの成果が大きな貢献を果たすものと期待される．なお，今回の講演要旨集はJournal of African Earth Sciences（Volume 27, Number 1A）のSpecial Abstracts Issueとして刊行されたので，興味のある方はそれをご覧いただきたい．

（吉倉紳一　高知大・理学部・自然環境科学科）
（吉田　勝　大阪市立大学・理学部・地球学科）

アメリカ地質学会1998年総会（トロント）に参加して

去る10月26–29日に開催されたアメリカ地質学会（GSA）1998年年総会（トロント）に出席し，ポスト巡検にも参加したのでその概要を報告する．

アメリカ地質学会1998年総会はカナダトロントのConvention Centerで開かれ，地球科学，教育，環境問題について合計180の分科会で2,800の講演（口頭とポスター）が行われた．また，190の出版社や測量機器の展示即売，世界の地質調査所や州調査所の展示や集会が開かれた（今年は2回目で17の国の調査所から41人が参加した）．合計6,000人の地質学関連の研究者や教師などと20の組織が参加した．また，17の巡検と16のショートコースやワークショップが開かれた．いろいろな情報を満載した，Down to Earthという瓦版というべきニュースが毎日発行され，プログラムの変更などを知らせてくれた．すべてのイベントやプログラムはインターネットのホームページ上で見ることができ，講演要旨もインターネットで申し込みができる（www.geosociety.org）．アメリカ地質学会といえども，地質学関連学会では国際的な大きな学会でInternational Geological Congress（次回は2000年にリオデジャネイロで開催予定）に匹敵する．

私は10月27日にトロントに到着し，10月28日の午前に開催されたlandslide and engineering geologyの分科会で「北海道における最近の斜面災害」を報告した．今年の異常

気象を反映して，カリフオルニヤ州やオレゴン州の斜面災害をはじめカナダオンタリオ州海成粘土の地すべりなどの発表があった．また，応用地質部会の昼食会にも出席し，30人位の参加で賞の授与も行われた．その夜，4件のパブを4台のバスではしごするPub Crawl Tourに参加し，それぞれの店の地ビールを味見しつつ，色々な地質屋との議論は楽しいものであった．年総会終了後ポスト巡検（ナイアガラ半島のシルリヤ紀―デボン紀の層序学）に1泊2日の行程で参加した．ほとんど水平に近い砂岩と泥岩の浅い環境の堆積物で，地震による乱堆積構造，生痕化石，波浪痕，腕足貝化石，ストロマトポロイド（8ページ写真；右端は案内するシンシナチー大学のCarlton Brett教授）などを堪能しつつ，最近のシークエンス層序学の一端を垣間見ることができた．

（山岸宏光）

ブルース・チャペル退官記念討論会

On the Bruce Chappell Symposium

記念夕食会でお祝いに駆けつけたお姉さんと談笑するブルース．

S，Iタイプ花崗岩の提案で著名なブルース・チャペル教授は1998年6月でもってオーストラリア国立大学（ANU）を退官した．同氏の研究業績を讃え，かつ同氏のアイデアを更に発展させるべく，標記の会合（The Bruce Chappell Sympsium : Granites, Island Arcs, the Mantle and Ore Deposits）が1998年11月23（月）～24（火）日の2日間に亘り，キャンベラにおいて新築のオーストラリア地質調査機構（AGSO）の会議室で開かれた．

発表は過去30年に亘る教え子たちの研究が中心で，オーストラリアの研究テーマが主体であったが，セント・アンドリュース，ハノーバー，パサディナ，筑波からも友人達が参加し研究発表を行った．SHRIMP，XRF等を駆使したオーストラリアの花崗岩研究レベルは高く，且つ発表内容は来夏をめざして出版される予定であるので，以下にプログラムを紹介して会員の便宜に供したい．

なお昼間の部，夜の祝賀会を通じて，マイクロバスの全面に相図を描き，巡検を行った話など，ブルースにまつわる多くの逸話が紹介されたが，彼の若い頃の言語録をLesley Wybornの発表から紹介しよう．

君のデータを正確に定量化しろ．高精度のデータには誰も議論できない．

（濃集）メカニズムについては気にするな．周囲が納得するデータを集めよ．

ウェーゲナーの大陸漂移説が良い例だ（プレートによる運動のメカニズムは60年後に解明された）．

花崗岩は起源物質をイメージする．

［第1日］

9 : 00～9 : 15　歓迎挨拶．N. Williams（AGSO所長）

9 : 15～ 9 : 30　B.W. Chappellについて．A.J.R. White（メルボルン大）

1．花崗岩質マグマ

9 : 30～10 : 00　レスタイトモデル：岩石成因論における革命？B.W. Chappell（GEMOC）

10 : 00～10 : 30　溶融花崗岩から固相反応まで：結晶分化作用は如何に働くか．D. Wyborn（GEMOC）

10 : 30～11 : 00　斜長石：脱水溶融で生じる問題児．W. Johannes（ハノーバー大）

11 : 30～12 : 00　ジルコンから見た南東オーストラリアの大陸地殻進化．I.S. Williams（ANU）

12 : 00～12 : 30　メーン州，Vinalhaven岩体に見る玄武岩質と花崗岩質のマグマのminglingとmixing：組織変化による花崗岩成因論に対する貢献．M. Rhodes（マサチューセッツ大）

2．花崗岩，関連岩類と鉱床

13 : 30～14 : 00　水，レスタイトおよび鉱化作用．A.J.R. White（メルボルン大）

14 : 00～14 : 30　環太平洋地域顕生代花崗岩類の酸化・還元状態．石原舜三（地調）

14 : 30～15 : 00　花崗岩類に関連する鉱床生成区．Phil Blevin（GEMOC）

15 : 30～16 : 00　花崗岩メルトを含む相関係．R. Powell（メルボルン大）

16 : 00～16 : 30　花崗岩から鉱床探査へ．S. Beams（テラ探査社）

16 : 30～17 : 00　地殻ダイナミックスと熱進化に対する統合モデル：花崗岩貫入機構への適用．L. Moresi（CSIRO）

17 : 00～17 : 30　総括．A.J.R. White

17 : 30～18 : 30　AGSO新庁舎の見学．

［第2日］

3．地質時代と花崗岩活動

9 : 00～ 9 : 30　Rockhamton地方のニューイングランド深成岩類：コルディレランスタイル？C.M. Allen（GEMOC）

9 : 30～10 : 00　オーストラリアの古生代中期花崗岩類：ヨーク岬–ラクラン花崗岩帯．B.W. Chappell（GEMOC）

10 : 00～10 : 30　オーストラリアの原生代花崗岩類：その特徴，起源，分化と迸入機構．L.A.I. Wyborn（AGSO）

11 : 00～11 : 30　イルガンとピルバラ地塊の始生代花崗岩類．D.C. Champion（AGSO）

11 : 30～12 : 00　北部ヨーロッパのカレドニア花崗岩類．Ed. Stephens（セント・アンドリュー大）

12 : 00～12 : 30　北アメリカ西部花崗岩バソリスのテレイン分帯．L.T. Silver（カリフォルニア工科大）

4．島弧とマントル

13 : 30～14 : 00　沈み込み帯発生マグマに対する新しい視点：オーストラリア国立大におけるレーザー溶発微晶分析．S. Eggins（GEMOC）

14 : 00～14 : 30　ニュージーランド火山の安山岩質マグマの化学的性質の規制するプロセスとIタイプ花崗岩への帰属性．P.C. Price（ニューイングランド大）

14 : 30～15 : 00　大陸性洪水玄武岩とその下のリソスフィアの性質．J.M. Hergt（メルボルン大）

15 : 30～16 : 00　マントルは如何にして花崗岩マグマを造るか．W.L. Griffin（GEMOC）

5．岩石分析手法とデータ解析

16 : 00～16 : 20　ペガとモルヤバソリスにおけるスィート識別法；化学分析値データベースのmultivariate entropy analysis．R.H. Flood（ANU）

16 : 20～16 : 40　ジルコンとアパタイト中の微量成分：岩石成因論と鉱床探査への応用．E.A. Belousova（GEMOC）．

16 : 40～17 : 00　ハワイ島火山岩類へのXRFの適用．J.M. Rhodes（マサチューセッツ大）

17 : 00～17 : 30　物理学研究室から日常分析まで：XRFの50年．K. Norrish（CSIRO）

17 : 00～18 : 00　総括．A.J.R. White

所属注

1）AGSO : Australian Geological Survey Organization

2）GEMOC : A National Key Centre on the Geochemistry and Metallogeny of the Continent

なお，B.W. Chappellの略歴は次のとおり．

1958年　ニューイングランド大を主席（University medal）で卒業．

1961年　修士課程修了：ニューイングランド，ペルム紀ボルドウィングレイワッケの埋没変成作用と化学組成．ANU講師．

1962年　花崗岩研究を開始し，Tuttle & Bowen（1958）に傾倒する．

1967年　Moonbi花崗岩の研究でPh. D.取得．XRFの確立，Suite概念を提唱，包有物の組織的研究でレスタイトモデルに着想．

1974年　S，Iタイプ花崗岩類の提唱．

1970年代後半　花崗岩化学分析の組織的分析が3,000個に達する．

1988年　オーストラリア地質学会のStillwellメダル受賞．

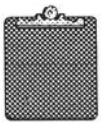
1992年　花崗岩の研究でD. Sc.取得．ANU教授．

1998年　オーストラリア科学アカデミー会員

（石原舜三）

寄贈本・紹介依頼本

・兼岡一郎：年代測定概論　東京大学出版会
・飯山敏道：地球鉱物資源入門　東京大学出版会
・財団法人災害科学研究所：阪神・淡路大震災調査報告一覧　平成10年11月



ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会よりの催し物のご案内を掲載します.

第35回日本水環境学会セミナーのご案内「酸性雨問題の現状と水環境への影響」

主　催：(社)日本水環境学会

地球規模の環境問題の一つとして，酸性雨による生態系への影響があります．我が国においては,土壌による緩衝能が高いことから,水環境への影響はすぐには起こり得ないとされてきたため，必ずしも関心が高いとはいえません．しかし，酸性雨の影響によると思われるpHの低い陸水が，我が国においても観測されはじめてきています．このため，本セミナーでは，酸性雨問題の現状と，水環境への影響に関してわかりやすく解説することとしました．多数の方のご参加をお待ちしております.

期　日：1999年3月8日（月)～9日（火）
場　所：自動車会館2階大会議室（東京都千代田区九段南4−8−13　電話03−3264−4719）JR市ヶ谷駅，地下鉄有楽町線・南北線，下車2分
参加費：会　員　　15,000円
　　非会員　　30,000円
　　学生会員　　5,000円
定　員：150名
申込方法：ハガキまたはFAXに①参加者氏名（フリガナ），②会員・非会員の別，③会員の場合は会員番号（ただし，学生会員は不要），④連絡先（所属団体名，住所および電話・FAX番号）をご記入の上，下記までお申し込み下さい．参加を受け付けた方には受付はがきを送付しますので，参加費を2月15日までにお振り込みください.
申込先：(社)日本水環境学会　セミナー係
〒160−0003 東京都新宿区本塩町12
四谷ニューマンション307号
電話 03−3351−2272　Fax 03−3351−2317
E-mail : jswe@mb.infoweb.ne.jp

《プログラム》

第1日［3月8日(月)］
9 : 00− 9 : 30　受　付
9 : 30− 9 : 40　開会の挨拶
9 : 40−10 : 55　酸性雨問題の現状と課題
国立環境研究所地球環境研究グループ
村野健太郎
11 : 10−12 : 15　酸性物質の発生源からの輸送現象
九州大学応用力学研究所　鵜野伊津志
13 : 30−14 : 45　酸性雨の陸水影響予測モデル
電力中央研究所我孫子研究所　宮永洋一
15 : 00−16 : 15　酸性雨の水環境への影響モニタリング
酸性雨研究センター生態影響研究部
福崎紀夫

第2日［3月9日（火)］
9 : 30−10 : 45　酸性物質の流域への負荷
神奈川大学工学部　井川　学
11 : 00−12 : 15　土壌における酸性物質の緩衝機構
農水省農業環境技術研究所　新藤純子
13 : 20−14 : 35　水環境中におけるアルミニウムの形態
群馬大学工学部　角田欣一
14 : 50−16 : 05　水環境の酸性化に伴う陸水魚類生態系への影響
東京大学海洋研究所　金子豊二
16 : 05−16 : 10　閉会の挨拶
＊講師の都合等で内容に一部変更のある場合があります.

Toward a Science of Consciousness –Fundamental Approaches– Tokyo '99（脳と意識に関するTokyo '99国際会議）

日　時：1999年5月25日（火)～28日（金）10 : 00～17 : 00
場　所：国連大学本部（東京都渋谷区神宮前5丁目）
内　容：脳組織の如何なる機能並びに素過程から意識が生じるか，認知科学，哲学，情報科学，物理学，数学，生命科学などの観点による最新の研究成果をまとめる．特別講演と一般講演，ならびにポスター発表の予定.
講演予定者：武田　暁（東北学院大)，佐藤文隆（京大)，松本　元（理研)，土屋　俊（千葉大)，苧阪直行（京大)，治部眞里（ノートルダム清心女子大)，B. Baars（Wright研究所)，D. Chalmers（California大Santa Cruz校)，S. Greenfield（Oxford大)，G. Globus（California大Irvine校)，S. Hameroff（Arizona大)，A. Hobson（Harvard大)，P. Hut（Princeton高等研究所)，G. Lakoff（California大Berkeley校)，M. Lockwood（Oxford大)，E. Nelson（Princeton大)，K. Pribram（Radford大)，P. Pylkkanen（Skovde大)，W. Seager（Toronto大)，J. Tuszynski（Alberta大)，G. Vitiello（Salerno大)，P. Werbos（National Science Foundation）他
定員　300名（先着順）
参加費：25,000円（1999年2月2日までの早期申込）30,000円（1999年2月3日以降の申込）10,000円（学生・院生）
連絡先：700−8516　岡山市伊福町2−16−9
ノートルダム清心女子大学　情報理学研究所内　Tokyo '99組織委員会事務局
電話 086−255−5636　Fax 086−255−5090
電子メール　tokyo99@zoushoku.narc.affrc.go.jp
ホームページ　http://www.ias.unu.edu/activities/tokyo99.htm

第36回理工学における同位元素研究発表会発表論文募集

標記の研究発表会を下記の要領で開催いたします．この研究発表会の目的は，異なった専門分野の研究者が一堂に会し，同位元素および放射線の利用の技術を中心とした研究，およびその技術の基礎となる研究の発表と討論を行い，各専門分野間の知識と技術の交流を図ろうとするものであります．奮ってご応募，ご参加下さい.

会　期：1999年7月5日（月)～7月7日（水）
会　場：国立教育会館（東京都千代田区霞が関3−2−3)
内　容：それぞれの研究分野において，その専門的成果を得るにいたった放射性および安定の同位元素ならびに放射線の利用の技術に重点をおいた研究およびこれら同位元素，放射線の利用の基礎となる研究．研究の内容には，少なくとも一部に未発表の部分が含まれていること.
発表形式：口頭発表またはポスター発表.
発表申込区分：
(1)基礎的データ (2)放射線測定機器・測定法 (3)分析（放射化分析，放射化学分析等) (4)トレーサ利用 (5)照射効果 (6)製造・分離・標識化 (7)線源・加速器 (8)放射線利用機器（ラジオグラフィ，エネルギー利用，発光塗料等も含む) (9)陽電子消滅 (10)メスバウア効果 (11)放射線管理（汚染除去，健康管理，安全取扱，廃棄物処理，運搬，しゃへい，コンピュータによる管理等) (12)地球科学・宇宙科学(13)環境放射能 (14)ライフサイエンスにおける応用 (15)安定同

位体（16)放射線教育（17)放射線測定器，応用計測機器の新製品紹介［コマーシャルセッション］（口頭発表のみ）(18)特定区分　トリチウム（19)特定区分　クリアランス(20)その他

口頭発表時間：1件15分（発表12分，討論3分．原則としてOHPを使用する．）

ポスター発表：申込区分はありません．1件の発表に横90cm×縦120cmの展示パネル（クロス貼）2枚を用意します．

発表者の資格：発表者の一人が本発表会の主・共催学・協会の会員であること．

発表申込：所定の申込書（1件1通）により申込む．申込書は下記宛請求して下さい．
〒113-8941 東京都文京区本駒込2-28-45
日本アイソトープ協会学術課内
理工学における同位元素研究発表会運営委員会
電話 03-5395-8081　Fax 03-5395-8053
E-mail : gakujutsu@jrias.or.jp

発表申込締切：1999年2月27日(土)

講演要旨：発表申込があり次第，所定の原稿用紙をお送りします．口頭発表，ポスター発表とも，1件につき原稿用紙1枚．

講演要旨原稿締切：1999年4月15日（木）

参加費：無料

その他：

(1) フルペーパーの報文集は発行しません．日本アイソトープ協会が発行する学術誌“RADIOISOTOPES”に，この研究発表会の発表論文にかぎり，同協会会員以外でも投稿できます．

(2) 発表申込件数，発表内容等によっては口頭発表からポスター発表に，またはポスター発表から口頭発表への変更をお願いすることがあります．

(3) 研究発表会の機会を利用して，共催学協会等の関係者のインフォーマルな集会等に空いている会議室が利用できます．希望者は，1999年2月27日（土）までにご希望の人数等を上記運営委員会にご連絡下さい．

主催：日本アイソトープ協会

共催：日本地質学会ほか

2003年，国際レルゾライト会議を日本で
—ホームページ公開のお知らせ—

1990年にフランスで第1回目の地球深部プロセスおよび造山運動の解明をめざした国際レルゾライト会議（International Conference on Orogenic Lherzolite and mantle processes）が開催されました．来年度1999年にはイタリアで第3回目の会議が行われます．その次の第4回会議（2003年）を日本に誘致したいと，われわれ超塩基性岩を研究してきた日本の研究者達は考えています．そのためには，日本側の意志を統一し，次のイタリア会議の席でその意志を表明する必要があります．そのために，広く情報を提供するとともに，日本国内での研究活動の活性化をめざして，幅広く情報交換が可能になるようにと国際レルゾライト会議のホームページを金沢大学において作成してもらいました．

まだまだ不備な点はあろうかと思いますが，今後，「要望があれば，可能な限り対応する」とのことですので，気軽に小畑またはホームページ作成者の森下（金沢大学）までご意見をいただければ幸いです．

ホームページのアドレスはhttp://kgeopp6.s.kanazawa-u.ac.jp/~japan/thm.htmlです．ホームページは10月から試運転していました．岩石学だけでなく，実験，火山，地球物理などを専門としている方々の参加も，もちろん大歓迎です．BBSを設置したのでご意見を気軽に書き込んで下さい．特に大学院生の方は積極的に参加して下さい．また，リンク可能なHPがあれば，リンクさせていただきたいので，ご連絡下さい．

このホームページで自由に情報交換をし，2003年の会議までに研究のactivityがあがるよう，少しでも役に立ってくれれば良いと考えております．みなさんが参加して盛り上げて下さい．

「国際レルゾライトワークショップを日本に誘致する会」
世話人代表　小畑正明（京都大学）
obata@kueps.kyoto-u.ac.jp
文責・ホームページ作成
管理者　森下（金沢大学）
moripta@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

「第40回科学技術映像祭」学術研究部門　参加作品募集

内　容：本映像祭では，研究者個人または機関の作成した学術映像も募集しています．学会のビデオセッションでおかけになる，学術価値の高い映像を是非ご応募下さい．詳しくはhttp://www.jsf.or.jp/shinko/をご覧下さい．

締　切：1999年1月29日（必着）

発　表：1999年3月上旬

表　彰：内閣総理大臣賞，科学技術庁長官賞他

連絡先：〒102-0091 千代田区北の丸公園2-1　日本科学技術振興財団　振興部　四村
電話 03-3212-8487　Fax 03-3212-0014

公募

教官公募等の求人のニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

訂正

先月号にお知らせしました大阪工業大学工学部一般教育科教員公募結果のお名前に誤りがありましたので，訂正いたします．採用者　田中　淳氏

愛媛大学理学部教官の公募について

公募人員：助教授または助手　1名

分野，内容：地質学一般

層序学，堆積学，第四紀地質学，海洋地質学などの分野でフィールド調査に基づく研究・教育をすすめる人が望ましい．また着任後は，学内共同研究センター「沿岸環境科学研究センター（平成11年4月発足予定）」に所属しながら，理学部の授業，学生指導を担当する．

応募資格：学位（博士）を有するか，本年度中に取得の見込みがある人で，40歳以下が望ましい．

着任時期：決定後できるだけ早い時期

応募締切：平成11年1月31日

提出書類：

(1) 履歴書（写真付き）

(2) 研究業績リスト，主要論文5編以内の概要

(3) これまでの研究・教育経過と今後の研究計画，教育への抱負（2,000字以内）

(4) 論文の別刷り（各1部，コピー可）

(5) 推薦書，または人物・業績について問い合わせのできる人（2～3人）

応募書類送り先：
〒790-8577 松山市文京町2番5
愛媛大学理学部生物地球圏科学科
大野一郎
※（封筒に「応募書類」と朱筆してください）

公募に関する問い合わせ先：
愛媛大学理学部生物地球圏科学科
井内美郎　電話 089-927-9674
e-mail : yinouchi@sci.ehime-u.ac.jp

東京大学地震研究所の教官の公募について

公募人員：助手　1名

公募対象者：被害を与えるような陸域の大地震の破壊現象がどのように繰り返されるか，地表変形などの時間軸を持つデータを収集して，意欲的に研究を行う者．破壊の物理過程，強震動予測などの分野の研究者とのインタラクションを通じて，新しい研究分野を開拓することを期待する．

所属：地球流動破壊部門

応募資格：博士の学位を有する者（採用時に博士の学位取得が確実である者を含む）

採用予定時期：採用決定後できるだけ早い時

期
提出書類：
(1) 履歴書（書式自由）
(2) 研究業績リスト（印刷中の論文も含む，査読の有無を区別すること）
(3) 主要論文2編以内（業績リストに○印を付すこと）
(4) これまでの研究概要（2,000字程度）
(5) 研究計画（2,000字程度）
(6) 応募者について意見を伺える方2名の氏名・連絡先（住所・電話番号等）
公募締切：平成11年　2月18日（木）必着
問い合わせ先：
東京大学地震研究所地震予知研究推進センター　佐藤比呂志
電話 03-3812-2111（代）内線5737
e-mail:satow@eri.u-tokyo.ac.jp
応募書類提出先：
〒113-0032 東京都文京区弥生1-1-1
東京大学地震研究所人事掛宛て
＊封書を用い，表に「活断層助手応募書類在中」と朱書きし，書留郵便で送付して下さい．

東京大学大学院理学系研究科地球惑星物理学専攻教官公募のお知らせ

公募人員：固体地球物理学大講座　教授1名
研究分野：固体地球物理学（地球ダイナミクス，地球内部物理学，地震物理学）
着任時期：平成11年6月1日以降のできるだけ早い時期
提出書類：
1) 略歴書（学歴および職歴）
2) 業績目録（査読論文とそれ以外の総説等に分けて下さい）
3) 主要論文別刷（コピー可）5編以内
4) 研究業績の概要（A4用紙1枚に要約）
5) 今後の研究計画および抱負（A4用紙1枚に要約）
6) ご本人が応募される場合は所見を伺える方（2名）の氏名および連絡先
適任者をご推薦頂ける場合は推薦状
応募・推薦締切：平成11年2月12日（金）必着
書類提出先：
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院理学系研究科
地球惑星物理学専攻事務室
（封筒に「教官応募書類在中」と朱書し，郵便の場合は書留でお願いします）
問い合わせ先：
固体地球物理学大講座
教授　松浦充宏
電話 03-3812-2111　内線4318
Fax 03-3818-3247
E-mail : matsuura@geoph.s.u-tokyo.ac.jp

大阪市職員（学芸員）募集要綱

募集人員：1名（第四紀学担当）
採用予定：平成11年4月1日
応募資格：次の各号の条件を満たす者
(1) 学校教育法による大学（短期大学を除く）を卒業した者（平成11年3月卒業予定者も含む），またはこれに相当すると人事委員会が認める者．
(2) 昭和38年4月2日以降に生まれた者．
(3) 大学等で，地質学・古生物学に関する研究業績（大学の卒業論文も含む）を有する者．
＊ただし，下記の「提出書類」により，応募資格を審査します．
(4) 地方公務員法第16条各号に該当しない者．
業務内容：採用後は大阪市立自然史博物館において，野外地質調査から得られる層序学・堆積学的成果に基礎をおいて第四紀古環境に関する調査研究をすすめるとともに，他の第四紀学分野の学芸員と分担しながら，第四紀学にかかわる資料収集・展示・普及教育などの業務に携わっていただきます．第四紀研究室は，館内の地史研究室ならびに生物系研究室（動物研究室・昆虫研究室・植物研究室），さらには埋蔵文化財調査機関と連携して「自然のしくみとその歴史，人と自然のかかわり」について総合化をはかり，その成果を館の諸活動に反映させることを目指します．
提出書類：
(1) 大阪市職員採用申込書（同封用紙使用，用紙のコピー可）　1通
(2) 大学学部から最終学校までの卒業（見込み）証明書　各1通
(3) 大学学部から最終学校までの成績証明書　各1通
(4) 研究指導者の推薦状　1通
(5) 卒業論文，修士論文，博士論文の要旨（各800字程度，すべて作成中を含む）各1通
(6) 現在までの研究経過と今後の研究の展望（1200字程度）　1通
(7) 業績リスト（学会発表を含む）　1部
(8) 公表論文の別刷（コピー可）　各1部
なお，(1)は本人自筆のこと．(2)，(3)については最終学校が博士課程の場合は，修士課程のものも必要である．(5)については卒業論文を卒業の必須条件としない大学の卒業者（及び卒業予定者）の場合，卒業論文の要旨は不要で，卒業研究の内容と結果（あるいは途中経過）を800字程度にまとめて提出のこと．
提出期限：平成11年1月29日（金）午後5時必着
願書提出および問い合わせ先：
〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23
大阪市立自然史博物館　庶務課（人事担当）
電話 06-697-6221（1月以降は06-6697-6221）
＊郵送の場合は書留扱いとし，封筒の表に「願書在中」と朱書してください．
試験：
(1) 選考手順
・筆記試験（書類選考合格者について行う）
（ア） 一般教養 （イ） 専門及び博物館学
・口述試験（筆記試験合格者について行う）
・身体検査（筆記試験合格者について行う）
(2) 試験日　平成11年2月16日（火），17日（水）
筆記試験および口述試験は，平成11年2月16日（火）に，身体検査は2月17日（水）に行う予定です．
(3) 場所・時刻　書類選考合格者に平成11年2月5日（金）以降に連絡します．
書類選考に合格された方には，文書で詳細を通知します．
備考：
(1) 給料については，大阪市研究職給料表が適用されます．
平成10年4月1日現在の初任給は次の通りです．
・大学学部卒（学芸員資格未取得者）
給与月額　219,670円
・大学院修了者等については，大阪市の給与規定による前歴加算があります．
(2) 本選考においては，博物館法第5条による学芸員資格の有無は判断材料としません．未取得の場合は学芸員補として採用され，採用後に資格を取得していただきます．
大阪市立自然史博物館の研究体制概要
1. 現在の研究体制
館長　第四紀古植物学・花粉学　那須孝悌
第四紀研究室　2名
第四紀軟体動物古生物学　石井久夫
環境地質学　石井陽子
地史研究室　3名
古脊椎動物学　樽野博幸
中・古生代微古生物学　川端清司
第三紀古植物学　塚腰　実
植物研究室　3名
種子植物分類・形態学　岡本素治
種子植物分類・生態学　藤井伸二
シダ植物生態学　佐久間大輔
動物研究室　3名
海産無脊椎動物分類学　山西良平
魚類分類学　波戸岡清峰
鳥類生態学　和田　岳
昆虫研究室　2名
鱗翅目昆虫分類学　金沢　至
鞘翅目昆虫分類学　初宿成彦
2. 当博物館は日本育英会より研究機関の指定を受けているので，大学院における育英資金の返還が免除されます．
3. 当館学芸員（及び学芸員補）は，文部省科学研究費補助金（基盤研究等）を申請することができます．
4. ホームページ（http：//www.mus-nh.city.osaka.jp/）でもご参照いただけます．

1999年地球惑星科学関連学会合同大会

会期：1999年6月8日（火）−11日（金）
会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

各種締切日

●講演登録最終締切
1999年2月26日午後5時
●参加登録締切
1999年3月31日午後5時
●青少年総合センターへの宿泊登録締切
1999年3月31日午後5時
上記の各種登録は下記の合同大会ホームページから行っていただきます．
http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth99/

目次

§1　合同大会案内サマリー
§2　セッション案内
§3　個人情報登録，講演登録，参加登録，宿泊登録，支払登録
§4　投稿費および参加費
§5　青少年総合センターへの宿泊
§6　大会組織委員会からのお知らせ
§7　住所変更の連絡について

§1　合同大会案内サマリー

下記のURLに1999年合同大会に関する情報および各種登録ページが置かれています．

……

合同大会ホームページ
http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth99/

……

詳しくは上記のホームページを御覧下さい．情報は随時更新しますので，参加者はぜひ時々御覧いただくようお願い致します．

§1.1　各種の登録（§3参照）

以下の登録はすべて上記ホームページから行っていただきます．

1）　個人情報登録
2）　参加登録

1）と2）は参加者全員に必須です．2）を行うためには，前もって1）が必要です．講演申し込みをされる方は1），2）に加えて

3）　予稿集原稿登録

を行ってください．共著の場合は，共著者についても1）が必要ですのでご注意ください．

会場の青少年総合センターへの宿泊を希望される方は，1)−3）に加えて，

4）　宿泊登録（§5）を行ってください．

§1.2　各種登録締切日および費用

●予稿集原稿登録（§4.1参照）
締切：2月26日（金）午後5時
投稿費（1件につき）：1,000−5,000円
図については追加料金による処理を検討中です．
●参加登録（§4.2参照）
締切：3月31日（水）午後5時
参加費：一般　5,000円，学生2,000円
●宿泊登録（§5参照）
締切：3月31日（水）午後5時
宿泊費：4泊5日固定スケジュールで
ユースホステルタイプ　11,000円
ビジネスホテルタイプ　19,000円

§1.3　保育希望の方へ

合同大会開催時間中に，1−6歳児の保育（実費負担）をご希望の方は，以下のアドレスまで電子メールでご連絡ください．

1999年合同大会保育室組織委員会
幹事：地質調査所　地殻物理部　森尻理恵
電子メールアドレス：g8808@gsj.go.jp

§1.4　住所変更（§7）

プログラムおよび予稿集CD−ROMは5月頃に地球惑星科学関連学会事務局から発送される予定です．転勤・卒業等で住所変更がある方は，§7の要領で3月31日までに住所変更手続きを行ってください．

§2　セッション案内

講演要旨の投稿は1−2月に合同大会ホームページ（§3参照）上で行なっていただきます．最終締切りは2月26日（金）です．

電子投稿に関する質問は下記で受け付けます：

1999年地球惑星科学関連学会合同大会登録事務局
〒530−0001　大阪市北区梅田2丁目4番9号　サンケイビル本館7階
e-mail : earth99staff@jtbcom.co.jp
Fax : 06−6456−4105
（注　局番の頭の「6」は1月1日よりおつけください．）

どうしても電子投稿の手段が確保できないという方は下記にご連絡ください．

1999年地球惑星科学関連学会合同大会組織委員会
〒060−0810 札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学地震火山研究観測センター内
E-mail : loc99-question@eos.hokudai.ac.jp
Fax 011−746−7404

§2.1　セッション一覧

セッション一覧は現時点では
http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth99/sesyon/sesyon.htmで見ることができます．それぞれのセッションについての問い合わせは，上記サイトに書かれている各連絡先へお願いします．

上記サイトに置かれているセッション一覧リストを以下に示します．ご参考まで．

凡例
確定記号：セッション名
連絡先：電子メイル

Av：火山活動のモニタリング，噴火現象の解明と災害予測
谷口宏充：taniguti@mail.cc.tohoku.ac.jp
Am：地層処分に関わる地球科学的課題
武田精悦：sft@tono.pnc.go.jp
Ap：21世紀の深海掘削と地球科学へのインパクト
平　朝彦：ataira@ori.u-tokyo.ac.jp
Ai：地球内部の構造・物性と大規模物質循環のダイナミックス
大谷栄治：ohtani@mail.cc.tohoku.ac.jp
As：地震・火山現象の解明と災害軽減のための史料地震・火山学の役割
小山真人：mkoyama@ed.shizuoka.ac.jp
Ae：地球惑星科学の電磁気学的透視図
藤本正樹：fujimoto@geo.titech.ac.jp
Af：地球科学における「乱流」へのアプローチ
伊賀啓太：iga@riam.kyushu-u.ac.jp
Ah：全地球史
川上紳一：kawa@cc.gifu-u.ac.jp
Aw：地球惑星進化における水の役割
奥地拓生：okuchi@eps.nagoya-u.ac.jp
Da：GPS気象学(II)
島田誠一：shimada@geo.bosai.go.jp
Db：測地学一般
飛田幹男：tobita@gsi-mc.go.jp
Dc：地球計測技術
山本明彦：star@eos.hokudai.ac.jp
Dd：地殻変動
藤森邦夫：fujimori@kugi.kyoto-u.ac.jp
De：海半球ネットワーク―観測網の展開と新現象の発見―
深尾良夫：fukao@eri.u-tokyo.ac.jp
Df：海底拡大系の地球科学
玉木賢策：tamaki@ori.u-tokyo.ac.jp
Dg：固体地球シミュレーター計画―固体地球変動の定量的予測に向けて
松浦充宏：matsuura@geoph.s.u-tokyo.ac.jp
Ea：大気圏の力学・化学過程
湯元清文：yumoto@geo.kyushu-u.ac.jp
Eb：地球内部電磁現象（電気伝導度・地殻活動電磁気学・磁場）
湯元清文：yumoto@geo.kyushu-u.ac.jp
Ec：地球・惑星磁気，古地磁気，岩石磁気，磁気異常
湯元清文：yumoto@geo.kyushu-u.ac.jp
Ed：電離圏・熱圏構造とダイナミクス
湯元清文：yumoto@geo.kyushu-u.ac.jp
Ee：磁気圏―電離圏結合
湯元清文：yumoto@geo.kyushu-u.ac.jp

Ef：磁気圏構造とダイナミクス
湯元清文：yumoto@geo.kyushu-u.ac.jp
Eg：太陽圏・宇宙線・太陽地球環境変動
湯元清文：yumoto@geo.kyushu-u.ac.jp
Eh：宇宙プラズマ素過程・プラズマ波動
湯元清文：yumoto@geo.kyushu-u.ac.jp
La：脆性破壊―塑性変形領域の断層岩と地震
藤本光一郎：fujimoto@gsj.go.jp
Lb：放射線効果による若い地質試料の年代測定とその新しい応用
豊田　新：toyoda@dap.ous.ac.jp
Lc：古気候・古海洋変動のダイナミクス
多田隆治：ryuji@geol.s.u-tokyo.ac.jp
Ld：第四紀
斎藤文紀：yoshi@gsj.go.jp
Ga：大陸の形成・消滅過程と地球物質循環
木村　学：gaku@geol.s.u-tokyo.ac.jp
Gb：花崗岩質マグマおよび高温-超高温変成作用
今井　亮：akira@geol.s.u-tokyo.ac.jp
Gc：地質一般
渡辺暉夫：teruwata@cosmos.sci.hokudai.ac.jp
Gd：岩石・鉱物の変形微細構造と物性
竹下　徹：toru@letitbe.geol.sci.hiroshima-u.ac.jp
Ge：上部マントル―海洋地殻の形成と上昇
宮下純夫：miyashit@sc.niigata-u.ac.jp
Ma：地球表層での化学過程と物質循環
河村公隆：kawamura@soya.lowtem.hokudai.ac.jp
Mb：地球表層での鉱物・水・大気・微生物の相互作用
村上　隆：murakami@min.s.u-tokyo.ac.jp
Mc：岩石・鉱物・資源・固体地球化学
有馬　真：arima@ed.ynu.ac.jp
Md：地球惑星物質の物理化学
河村雄行：kats@geo.titech.ac.jp
Pa：火星：探査と理論研究
品川裕之：sinagawa@stelab.nagoya-u.ac.jp
Pb：惑星大気
竹内　覚：se039153@ssat.fukuoka-u.ac.jp
Pc：比較惑星系形成論の展望:観測と理論
渡邊誠一郎：seicoro@eps.nagoya-u.ac.jp
Pd：惑星科学
阿部　豊：ayutaka@geoph.s.u-tokyo.ac.jp
Pe：太陽系における衝突
門野　敏彦：kadono@eps.nagoya-u.ac.jp
Pf：月の科学と探査
岡田達明：okada@planeta.sci.isas.ac.jp
Sa：海底に開く窓―海底での観測手段とそのデータ回収
島村英紀：shima@lobs.sci.hokudai.ac.jp
Sb：活断層と古地震
森田裕一：taikai-kikaku@eri.u-tokyo.ac.jp
Sc：地殻の温度構造と熱過程
木下正高：masa@scc.u-tokai.ac.jp
Sd：地震計測・処理システム
森田裕一：taikai-kikaku@eri.u-tokyo.ac.jp
Se：地震理論・解析法
森田裕一：taikai-kikaku@eri.u-tokyo.ac.jp
Sf：地震一般
森田裕一：taikai-kikaku@eri.u-tokyo.ac.jp
Sg：強震動・地震災害
森田裕一：taikai-kikaku@eri.u-tokyo.ac.jp
Sh：地盤構造・地盤震動
森田裕一：taikai-kikaku@eri.u-tokyo.ac.jp
Si：地震発生の物理
森田裕一：taikai-kikaku@eri.u-tokyo.ac.jp
Sj：地震に伴う諸現象
森田裕一：taikai-kikaku@eri.u-tokyo.ac.jp
Sk：島弧及びその周辺の構造とテクトニクス
平田　直：hirata@eri.u-tokyo.ac.jp
Sm：地震活動
森田裕一：taikai-kikaku@eri.u-tokyo.ac.jp
Va：マグマのダイナミクス
佐藤博明：hsato@kobe-u.ac.jp
Vb：マグマの生成と火山深部構造・プロセス
福岡孝昭：tfukuoka@ris.ac.jp
Vc：火山の形成過程
鎌田桂子：kamata@kobe-u.ac.jp
Vd：岩手火山等の最近の火山活動
西村太志：nishi@zisin.geophys.tohoku.ac.jp
Ve：ハワイ型火山：その成長と終焉
高橋栄一：etakahas@geo.titech.ac.jp

§3　個人情報登録，講演登録，参加登録，宿泊登録，支払登録

上記の各種登録は§1で書いた「合同大会ホームページ」の下に置かれている以下のページにて行っていただきます．
http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth99/touro/index.html
登録内容は以下のとおりです：
1.　個人情報登録（個人情報　ID番号取得）
2.　予稿集原稿登録，参加登録，宿泊登録
3.　支払登録

●個人情報登録と個人情報ID番号

合同大会に関係するすべての関係者の方々（共著者を含む）には，まずは，個人情報登録を行っていただき，個人情報ID番号を取得して頂きます.登録された個人情報は，個人情報ID番号によって参照され，予稿集原稿登録，参加登録，宿泊登録,支払登録に利用されます．この際，講演者だけでなく共著者も個人情報ID番号の登録が必要です．共著者の個人情報ID番号が登録されていない場合は，予稿集に共著者名が載らないことになりますのでご注意ください．個人情報登録後は，著者リストには個人情報ID番号を入力するだけでOKです．

個人情報登録のために必要な情報としては以下を予定しています：

氏名（漢字，カタカナ，英語）姓と名別々に
所属学会（複数選択式）
所属機関名（漢字，カタカナ，英語）
所属機関名略称（漢字，英語）（表示用）
所属機関住所（漢字，英語）
身分（学生，一般選択式）
学生証番号（学生の場合）（学生確認用）
一般の場合タイトル（教授，助教授，助手，等）
電話，Fax，E-mail

これらのデータは次年度以降の合同大会への各種登録の基礎データとして保存される予定です．

●予稿集原稿登録，参加登録,宿泊登録

詳細は§1に書いた「合同大会ホームページ」の下に置かれている
http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth99/touro/index.html
を御覧ください．必要な情報は1998年大会とほぼ同じです．予稿集原稿は原則として，通常テキスト形式のみとします．図については現在検討中ですが，図処理用料金支払いで受け付けることになる予定です．

●支払登録

http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth99/touro/index.htmlを御覧ください．

●プログラム編集作業

現段階では仕様は未定です．各セッションのセッションマスター1名（提案者，連絡先，コンビーナ等のうちの1人）がプログラム編集用のホームページにて作業を行います．
プログラム編集作業用ページ（コンビーナー用）：
テストページ　http://www.jtbcom.co.jp/tikyu9901/

§4　投稿費および参加費

クレジットカード払いまたは郵便振り込みが可能です．

§4.1　予稿集原稿登録料

受付日時
～1月26日（火）午後5時　1,000円
～2月19日（金）午後5時　1,500円
～2月24日（水）午後5時　2,000円
～2月25日（木）午後5時　3,000円
～2月26日（金）午後5時　5,000円

予稿集原稿に図を入れた場合の，図処理用料金は検討中です．決まり次第，合同大会ホームページ（§1参照）に掲載します．

§4.2　参加費

事前登録：3月31日（水）午後5時まで
一般　5,000円
学生　2,000円

当日登録：大会前日および期間中の会場の総合受付にて．現金払いのみ．
（大会前日は午後5時～9時，大会当日は午前8時30分～午後4時の予定）
一般　8,000円
学生　5,000円*

（*学生の当日登録は，ホームページ上にある学生証明書に指導教官の印と必要事項を記入したものをその場で提出した場合のみ，認められます．）予稿集原稿登録料と参加費は（センター宿泊の場合は宿泊費も）一括請求されます．クレジットカード払いの場合は登

録したカードから自動的に引き落とされ，郵便振り込みの場合は3月31日以降に振り込み用紙が郵送されます．

§5　青少年総合センターへの宿泊

大会会場の青少年総合センター附属の宿舎の宿泊予約の締め切りは3月31日です．宿泊予約は下記のホームページ上でのみ行っており，郵便，FAX等ではできません．http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth99/touro/index.html宿泊は大会前日の6月7日から11日朝までの4泊一括のみを受け付けます．チェックイン時間は6月7日の午後5時から9時までです．午後9時以降のチェックインはできませんのでご注意下さい．部屋はすべて個室で，4泊の料金はユースホステルタイプ（ベッドメーキングを利用者が行う）が11,000円，ビジネスホテルタイプ（バス・トイレ付き）が19,000円です．

他に旅行業者による宿舎，航空券の斡旋があります．詳しくは「合同大会ホームページ」（§1参照）を御覧下さい．

§6　大会組織委員会からのお知らせ

§6.1　電子化の継承および合同大会参加費・投稿料について

1998年の合同大会は電子化された最初の大会として成功を収めました．電子化のかなりの部分は，東大LOC，特に寺沢プログラム委員長と関係諸氏の超人的な努力と能力によって初めて成り立っていたため，今回，北大LOCがそれをそのまま引き継ぐことは不可能であることが分かりました．北大LOCとしては，今後どの機関がLOCを引き受けても，電子化を継承できる仕組みを構築しておくことが有用と考えました．この結果，せめてある程度の経験と熱意のありそうな業者に外注する形で電子化を継続・発展させることにしました．このやり方がうまく行けば，来年度以降のLOCはもっと楽に，同様な運営が可能となることを願っています．今年度は，初めての試みも多くあるため，皆様にご迷惑をお掛けしたり，戸惑いを与えることも多々あることと思われますが，今後の合同大会の円滑な運営のための布石として，ご理解とご協力をお願い致します．

今回の大会でも，予稿集原稿登録料と参加費の傾斜方式を採用することにしましたが，この傾斜が前回よりはきつくなっています．締切間際の事務量の集中を避けるためです．今年度も従来どおり学生会員の登録費を大幅に安くしています．しかし前回までは学生かどうかの同定の問題が生じたと聞いていますので，今回は登録手続きを多少改訂しました．その結果，学生にとっては手続きが少し増えましたが，合同学会の主旨をご理解いただき，ご協力をお願い致します．

§6.2　懇親会場

ポスター会場近くのレセプションホールに最終日を除く毎夕，ビールなどを飲みながら議論・歓談できる空間を設けます．

§6.3　展示申請

個人・企業などによる機器・書籍などの展示を希望される方は，次の3項目を文書に明記して，2月末までに大会組織委員会（§6.5参照）に申請してください．

1）展示内容
2）必要スペース
3）責任者（Fax，e-mail）

§6.4　会合・集会申請

会合または集会を希望される方は，次の5項目を文書に明記して，2月末までに大会組織委員会（§6.5参照）に申請してください．

1）会合または集会名
2）人数
3）希望開始・終了時刻
4）責任者（Fax，e-mail）
5）食事の必要性．（ただし会場側の規則により，食事を伴う会合・集会が可能な場所はわずかしかありませんので，ご承知おきください．）

§6.5　1999年合同大会組織委員会の構成と連絡先

大会委員長　島村英紀
shima@lobs.sci.hokudai.ac.jp
実行委員長　山本哲生
yamamoto@cosmos.sci.hokudai.ac.jp
企画委員長　宇井忠英
ui@cosmos.sci.hokudai.ac.jp
同副委員長　岡田尚武
oka@cosmos.sci.hokudai.ac.jp
広報委員長　小泉　格
itaru@cosmos.sci.hokudai.ac.jp
プログラム委員長　中嶋　悟
satoru@cosmos.sci.hokudai.ac.jp,
情報化委員長　林　祥介
shosuke@gfd-dennou.org
経理委員長　蓬田　清
yomo@crane.sci.hokudai.ac.jp
同副委員長　鈴木徳行
suzu@cosmos.sci.hokudai.ac.jp
LOC ML管理委員長　山本明彦
star@eos.hokudai.ac.jp
事務局長　藤野清志
fujino@cosmos.sci.hokudai.ac.jp
事務局各担当
受付　渡部重十
shw@pspace.sci.hokudai.ac.jp
会場　在田一則
arita@cosmos.sci.hokudai.ac.jp
宿泊　豊田和弘
kazuhiro@high.hokudai.ac.jp
アルバイト　橋元明彦
akihiko@cosmos.sci.hokudai.ac.jp
ポスター　新井田清信
kiyo@cosmos.sci.hokudai.ac.jp
広報　倉本　圭
keikei@neko.lowtem.hokudai.ac.jp
秘書　嘉納智子
tomoko@cosmos.sci.hokudai.ac.jp
連絡会事務局長　本蔵義守
yhonkura@geo.titech.ac.jp

●お問い合わせ先

■大会全般・大会プログラムなど内容に関して：
1999年地球惑星科学関連学会合同大会組織委員会
〒060–0810 札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学地震火山研究観測センター内
e-mail : loc99-question@eos.hokudai.ac.jp
Fax : 011–746–7404

■参加登録・講演登録など実務作業に関して：
1999年地球惑星科学関連学会合同大会登録事務局
〒530–0001 大阪市北区梅田2丁目4番9号
サンケイビル本館7階
e-mail : earth99staff@jtbcom.co.jp
Fax : 06–6456–4105（注　局番の頭の「6」は1月1日よりおつけください．）

§7　住所変更の連絡について

合同大会のプログラムは地球惑星科学関連学会事務局が管理する共通名簿に基づき，各人に郵送されます．転勤・卒業等で住所変更がある方は，3月31日までに以下の要領で住所変更手続きを行ってください．

●連絡先：
地球惑星科学関連学会事務局長　本蔵義守
e-mail : yhonkura@geo.titech.ax.jp
〒152–0033 東京都目黒区大岡山2–12–1
東京工業大学理学部地球惑星科学
Fax : 03–5734–3537

●必要事項
氏名（アルファベット表記）：
氏名（漢字表記）：
新住所（郵便番号も）：
電話：
Fax :
e-mail :

地球惑星科学関連学会連絡会ニュース　第17号　1998年12月2日発行

発行：地球惑星科学関連学会連絡会
幹事　坪井誠司（日本地震学会）
編集：1999年合同大会実行委員会
委員長　山本哲生（北海道大学大学院理学研究科）
地球惑星科学関連学会連絡会
編集委員　加藤尚之（日本地震学会）

構造地質部会

日韓構造地質研究会 第2回合同大会のお知らせ

The 2nd. Joint Meeting of Korean and Japanese Structure and Tectonic Research Group

1st. circular

日本地質学会構造地質部会・構造地質研究会と韓国地質学会構造地質部会の共催で上記合同大会を開催します．ちなみに第1回は本年8月にソウル大学で開催され，太白山地域で巡検が行われました（地質学雑誌10号ニュース誌参照）．来年の合同大会の日程は下記のとおりです．

期　日：1999年8月19日～23日の5日間
（Period : 19–23 August, 1999 : 5 days）
場　所：北海道様似町
（Place : Samani Town, Hokkaido, Japan）

日　程（Schedule）：

8月19日（木）新千歳空港（13：00ごろの予定）→貸切バスにて昭和新山見学→様似町アポイ山荘
（Sapporo Intn. Airport→Mt. Showa-shinzan active volcano→Accomodation near Mt. Apoi）

8月20日（金）様似町附属図書館視聴覚ホールにて合同セミナーおよびポスターセッション開催
（Joint seminar and poster session in Samani Town）

8月21–22日（土・日）巡検：幌満カンラン岩体の変形，日高変成帯地殻深部変形変成作用，イドンナップ帯のメランジュ，歌露礫岩の変形
（Field excursion of the Hidaka Metamorphic rocks, Horoman Peridotite,Idonnappu Melange and Deformation of Utaro Conglomerate）

8月23日（月）様似町→新千歳空港（解散）
（Samani Town→Sapporo Intn. Airport）

宿泊は全日程様似町アポイ山荘とアポイ岳調査研究支援センター

セミナーの内容：

主題：日本海（東海）が開く前の日韓のテクトニクスと地質学的対比
（Main topics: Geotectonic correlation between Korea and Japan before the opening of Sea of Japan（East Sea））

期待されるサブトピックス（Subtopics）：

1. 韓半島と日本列島の延性–脆性剪断帯の時空対比
（Time and space relationship of ductile and brittle shear zones between Korean Peninsula and Japanese Islands）
2. 沃川帯と飛騨帯の地質学的対比ならびに沃川帯の東方延長問題
（Geological correlation between the Okcheon and Hida belts, Topics on the eastern extension of the Okcheon belt）
3. 白亜紀横ずれ堆積盆，慶尚層群と関門層群の堆積盆の発達過程
（Geotectonic evolution of the Cretaceous strike-slip basin, and of the Gyeonsang and Kanmon basin）
4. 韓半島と九州の白亜紀火成作用の対比と変遷およびテクトニクスとの関係
（Evolution and tectonics of the Cretaceous igneous activity in Kyushu and Korean Peninsula）

20日には，様似町附属図書館の視聴覚ホールで，上記テーマを中心に口頭発表を行います．そのほか，構造地質・テクトニクスに関する個別テーマは，隣接する会場でポスターセッションとして用意する予定です．

参加・発表申込み：申し込みは，下記用紙をコピーしていただき，郵送またはFaxで高木秀雄宛に送ってください．すでに，11月末時点で構造地質研究会電子メールネットワークを通じて30件の参加希望が寄せられ，韓国側からも15名ほどの参加が予定されています．なお，参加費用に関する情報は6月号ニュース誌でお知らせします．

ちなみに学生・院生対象の宿泊施設（アポイ岳調査研究支援センター）は素泊りで500円（布団付）です．

参加申込先：〒169–8050 東京都新宿区西早稲田1–6–1
早稲田大学教育学部地学教室　高木秀雄

Please send a copy of the registration form (below) by fax or mail to
Dr. Hideo Takagi
Institute of Earth Science, School of Education,
Waseda University, Nishi-waseda, Shinjuku,
Tokyo 169–8050, Japan
Tel : +81–3–5286–1510
Fax : +81–3–3207–4950
e-mail : hideo@mn.waseda.ac.jp

申込締切：1999年3月31日（金）（Deadline : 31st. March 1999）

参加申込書（Registration Form）

括弧内にレ印をつけてください（Place check next to your choice）
1. セミナーに参加したい（I plan to attend the seminar［　］）
2. 巡検（後半）に参加したい（I plan to attend the post-conference field trip［　］）

発表希望の方は，その英文タイトルを書いてください．
I would like to give a talk（　）/a poster（　）
Title of talk/poster :

氏名（Name）:

所属・職（Affiliation/Position）:

連絡先住所（Address）:

Tel/FAX :

E-mail :

研究室紹介　No. 5

金沢大学理学部地球学教室 石渡研究室

ホームページ：http://kgeopp6.s.kanazawa-u.ac.jp/Ishiwatari/Ishiken.html
スタッフ：石渡　明（助教授）

研究室概要　当研究室では，主に火成岩と変成岩の岩石学と岩石化学の研究をしています．特に，オフィオライト（日本・ロシア極東），変成岩・高圧～超高圧変成岩（日本・中国），北陸地域の火成岩の研究に励んでいます．地下水や温泉水の温度や化学組成の経年変化についても，地震予知や水−岩石相互作用との関連で研究しています．1996年度からの大講座制への移行に伴い，旧地殻化学講座から3つの研究室が誕生し，石渡研究室が発足しました．1998年10月現在の学生数は，後期博士課程（博士課程）1人，前期博士課程（修士課程）5人（うち，留学生1人，女性1人），4年生2人（うち女性1人），計8人です．4年生は，荒井・寅丸・田村研究室の4年生と相部屋で，1階の112室（機器分析準備室）に1人1つの机を構えて研究しています．修士の学生は，2階の院生室（207室），博士の学生は2階（208室）または6階の院生室（603室）にいます．4年生も申請すれば電子メールアドレスを得て，居室からインターネットを利用した情報収集や電子メールを利用した情報交換が行えます．当研究室では当時院生の石田勇人さん（現在，岡山大・固体地球研）が中心となり，1996年度よりホームページを開設しています．

毎週金曜日の石渡ゼミでは主に各自の研究に関連した論文のレビューを通し，各自の研究の方向性・問題点など議論しています．プレゼンテーションの技術についても，活発な議論がなされています．また，毎週火曜日の地化ゼミでは，旧地殻化学講座の荒井研究室・寅丸研究室・田村研究室とが合同し，各自の研究についての方針・進行状況・成果について，4人のスタッフを迎え，徹底した議論・討論が行われています．その他に教室全体の地球学ゼミがあります．

研究内容　研究課題の選択とその後の研究の進め方については，学生自身の興味と意欲に基づく自発的・自主的な決定を尊重するため，各個人の研究は国内外の多岐に渡っていますが，いずれの研究も「プレート収束域での地質現象の解明」という共通した目的を持っています．研究においては，野外調査を重視し，岩石薄片の顕微鏡観察の他に，電子線プローブ分析装置（EPMA），走査型電子顕微鏡-X線装置（SEM−EDAX），蛍光X線装置（XRF），X線回折装置（XRD），液体クロマトグラフィーを用いた機器分析，京都大学原子炉実験所（KURRI）・金沢大学放射性同位体（RI）理工系実験施設などを利用した中性子放射化分析などを行っています．

現在，以下のメンバー構成でそれぞれの研究課題のに取り組んでいます．（「　」は各自のコメント）

- 辻森　樹（D3・日本学術振興会特別研究員［DC2］）：西南日本～ロシア沿海州の古生代オフィオライトと藍閃変成岩の研究など．「日々，家族サービスと研究に徹し，自分が何に貢献できるか模索中．緊急課題：じっくり考えること・学位論文・思考訓練・大不況時代の生き残り策．」（研究室と教室のWebページ制作・管理担当）
- 伊藤秀樹（M2）：飛騨外縁帯中・西部の結晶片岩類と超苦鉄質岩類の岩石学．「得意技：トレーシングペーパー・グラフ用紙・テンプレート・カラーペンを駆使して描く手書きの図．」
- 齋藤大地（M2）：ロシア極東タイガノス半島エリストラートバオフィオライトの地質と岩石．「今欲しいものは，シュールレアリズムな日常から，目がさめるような印象派的色彩を再構築する想像力です．好きなものは警視庁24時．」
- 本谷　充（M2）：福井県三国海岸東尋坊周辺のピジョン輝石斑晶を含む安山岩の研究．「石川県加賀市大聖寺出身石渡部屋期待の関取モティーです！得意技は，寄り切りとうっちゃりです．根性一つでここまで這いあがってきました！がんばるだけっす．」
- カルロス・ロペス（M2）：能登半島北東部小木付近の第三紀火成層序の研究．「毎日の努力で得られた火山岩石学の知識を母国での研究に役立てたいです．」
- 近藤美紀（M1）：能登半島北西部の高カリウム系列黒崎火山岩類の結晶分化作用．「日々普通に暮らしているのに，トラブルにみいられていて．車の事故は特筆もの．時と場所を選びません．」
- 武藤俊充（B4）：付加体緑色岩の比較研究：福井県丹波帯と滋賀県の霊仙石灰岩体．「性格：マイペース．好きなこと：睡眠．…こんなことでいいのかー！」
- 山本朗子（B4）：金沢市医王山の流紋岩・真珠岩（パーライト）溶岩の産状と化学組成変化の研究．「いつ行っても鳶岩には人がいていい感じ．」

最近の現状　これまで，何かと頼りにしてきた石田さんが学位をとって三朝にいってしまい，1人すくない新学期がスタートしました．4年生の2人は大学院へ進学希望です．修士2年は2人が就職内定しました．博士3年は学位論文体制に入り忙しいそうです．現在，3年生4人が石渡研究室を希望しているとか……

あとがき　当研究室では岩石学を中心とし，多岐にわたる研究テーマを追求する8人の学生が，石渡　明教官のもと，屋外ではハンマーを振り回し，屋内ではグラインダーにミルにハードディスクに頭脳までも高速回転させ，目を回しそうな毎日を過ごしています．ここ一番の勝負強さを発揮するメンバーが多いのも，日々の努力の裏付けではないでしょうか．個性の強い学生達を，それぞれの持ち味を損なわぬよう石渡さんが上手に束ね，最高チームワークが達成されています．また，荒井・石渡・寅丸・田村体制で岩石学グループ（旧地殻化学講座）の協力体制という恵まれた議論の場もそろっています．そんな我らが研究室に関心のある方はどうぞ研究室のホームページにアクセスしてみて下さい．

院生コーナー

―アメリカの大学院に入学するまで―
from Penn State （2）

圓入敦仁（ペンシルバニア州立大学大学院）

aennyu@geosc.psu.edu

ペンシルバニア州立大学のユニバーシティー・パーク・キャンパスでは，秋の深まりとともに紅葉の美しい季節となりました．今回はアメリカの大学院で地球科学を勉強したいと思っている学部・院生会員の皆さんの参考になればと思い，大学院への出願プロセスを紹介したいと思います．ここでは3セメスター制の場合を例にしますが，大学によって4セメスター制もあるので，注意が必要です．

アメリカの大学院への願書提出の締め切りは，新年度が始まる秋学期に入学する場合，前年の12月からその年の1月中旬にかけてとなります．ペンステートでは基本的に大学院への入学は8月末からの秋学期になりますが，入学願書は年中受け付けており，春学期（1月）や夏学期（5月末）からの入学も可能です．

次に，入学審査はどのようにして行われるのでしょうか．日本の大学院との大きな違いは，アメリカの大学院の入学審査では，希望する大学に於いての“入学試験”行われません．審査される対象は，出願時に提出する“書類”になります．この書類の中で重要なのが，エッセイ（何を研究したいかを述べた小論文），推薦状，GPA（Grade Point Average：大学での成績），GRE（Graduate Record Examinations）の成績です．さらに，英語を母国語としない出願者（私たち日本人）の場合は，TOEFLのスコアが必要です．これらの提出書類の中で，どれに重点が置かれるかは大学によって異なりますが，やはりこれから研究者としてやっていくのだから，大学院での研究計画（エッセイ）は重要になると思います．これに次いで，推薦状，GPAでしょうか．GREは日本のセンター試験の大学院生版のような全国共通のテストで，北米のほとんどの大学院が採用しています．このテストは何回でも受験できるので，願書提出の1年くらい前から準備を始めるとよいでしょう．

入学願書を提出したら，あとは結果を待つのみです．規模の大きい研究大学だと，入学審査と同時に大学からのファイナンシャル・サポート（TAやRA，フェローシップなど）の選考も行われるので，大学院への合格通知とともに雇用の採用通知を受け取ることも多いようです．大学院に採用された学生は，新年度が始まる前の夏休み（6~7月頃）に学科の院生リクルーティング・コミッティに招待されて，研究施設や大学院の教育プログラムについての説明を受け，どこの大学院に入学するかを考えます．

アメリカの大学院入学までの，大まかな流れは以上の通りです．大学や学科の案内はインターネットを通して入手することができ，大学によってはアプリケーションフォームをダウンロードできたり，プレアプリケーションをホームページで受け付けているので，インターネットは最大限に活用したいものです．

研究室紹介や海外学会巡検報告についても常時投稿をお待ちしております．院生コーナーの編集は以下の3人で行っておりますので投稿は以下のメールアドレス宛でe-mailでいただければ幸いです．

yoshino@geol.s.u-tokyo.ac.jp　芳野　極（東大）
696g5059@mn.waseda.ac.jp　澤口　隆（早大）
massago@geo.titech.ac.jp　真砂英樹（東工大）

若手研究者メーリングリストへの参加方法

smlys@higo.gs.niigata-u.ac.jpあてに，subjectは空欄でSUBSCRIBE mlys Your Name（例：SUBSCRIBE mlys Takuji Hamamoto）のメールを送ってください．登録が完了されるとメッセージが返送されます．

支部コーナー

☆北海道支部

日本地質学会北海道支部総会ならびに例会の御案内

日本地質学会北海道支部1998年度総会・例会を下記の日程で開催いたします．多くの方々のご参加・ご講演をお待ちします．

記

日　時：平成9年3月13（土）13：00–17：00（予定）
会　場：北海道大学理学部S305教室
内　容：支部総会・個人講演

個人講演の申込と講演要旨原稿については，下記の要領で期日までにお願いします．講演要旨は当日会場で配布いたします．なお，時間は講演数により，若干の変更が予想されます．

講演申込・要旨原稿作成要領：

＜個人講演申込＞

講演希望者は，1999年1月15日（火）までに講演題目・講演者名・所属（連絡先）を下記まで郵送，Faxまたは電子メールでご連絡下さい．電子メールでの連絡を歓迎します．なお，申し込み者リストは，2月号の地質ニュースに掲載予定です．

＜講演要旨原稿申込＞

・原稿：文章は横書きで，要旨の初めに講演題目・講演者名・所属を明記して下さい．
・用紙：A4判の縦置き，4ページ以内とします．周囲の余白を，上下各30mm，左右各25mm以上とって下さい．
・原稿の送付：1999年2月19日（土）までに郵便（または手渡し）でお送り（お渡し）下さい．原稿はそのままのサイズでコピー・製本しますので，作成の際は文字の大きさ・行間など，仕上がりが鮮明なものになるようご配慮願います．なお，Fax，電子メールによる送付は受け付けません．上記以外の書式・様式は自由です．

個人講演申込・講演要旨原稿送付先：

〒060–0810　札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地球惑星進化科学講座　坂本竜彦宛
Fax：011–746–0394　E-mail：tats@cosmos.sci.hokudai.ac.jp

問い合わせ先：

坂本竜彦（大学院理学研究科地球惑星科学専攻），または
塩野正道（大学院理学研究科地球惑星科学専攻）
電話：011–706–2726　Fax：011–746–0394

The Island Arcだより

一年の最後の号ですので，今回は今年（Vol. 7）のThe Island Arcに掲載されました論文を一括して紹介したいと思います．なお，最新号の掲載予告などは，地質学会のホームページのアイランドアーク事務局ページでも参照していただけますので，そちらの方もご利用ください．1999年も，論文の投稿や雑誌購読等，みなさまからの積極的なご協力とご支援をよろしくお願い申し上げます．よいお年をお迎えください．

Volume 7, Issues 1/2

＜Thematic Section : Dynamic metamorphic rocks and high- and ultrahigh-pressure metamorphism＞

Introduction to geodynamics for high- and ultrahigh-pressure metamorphism
J.G. Liou, S. Maruyama and B. Cong

Initiation of ultrahigh-pressure metamorphism and its significance on the Proterzoic - Phanerozoic boundary
S. Maruyama and J.G. Liou

A petrogenetic grid for eclogite and related facies under high-pressure metamorphism
C.W. Oh and J.G. Liou

Multi-anvil re-equilibration experiments of a Dabie Shan ultra-high-pressure eclogite within the diamond-stability fields
K. Okamoto and S. Maruyama

Kinetic modeling of the coesite - quartz transition in an elastic field and its implication for the exhumation of ultrahigh-pressure metamorphic rocks
T. Nishiyama

Petrogenesis of dolomitic marbles from Rongchen in the Su-Lu ultrahigh-pressure metamorphic terrane, eastern China
Y. Ogasawara, R.Y. Zhang and J.G. Liou

Petrogenesis of impure dolomitic marble from the Dabie Mountains, central China
S. Omori, J.G. Liou, R.Y. Zhang and Y. Ogasawara

Petrogenesis of an ultrahigh-pressure garnet-bearing ultramafic body from Maowu, Dabie Mountains, east-central China
J.G. Liou and R.Y. Zhang

Chrome-rich clinopyroxene in orthopyroxenite from Maowu, Dabie Mountains,central China: A second record and its implications for petrogenesis
X. Liu, H. Zhou, Z. Ma and L. Chang

Metamorphic zoning and thermal structure of the Dabie ultra-high -high-pressure terrane, central China
H. Tabata, S. Maruyama and Z. Shi

Metamorphic veins with kyanite, zoisite and quartz in the Zhu-Jia-Chong eclogite, Dabie Shan, China
D. Castelli, F. Rolfo, R. Compagnoni and S. Xu

Differential exhumation of tectonic units and ultrahigh-pressure metamorphic rocks in the Dabie Mountains, China
S. Dong, J. Chen and D. Huang

An overview and tectonic synthesis of the pre-Tertiary very-high-pressure metamorphic and associated rocks of Java, Sulawesi and Kalimantan, Indonesia
C.D. Parkinson, K. Miyazaki, K. Wakita, A.J. Barber and D.A. Carswell

The Island Arcのある風景．
ハーバード大学地球惑星科学教室にて
（信州大学　秋山雅彦先生撮影）

＜Thematic Section : Tectonics of accretionary complexes in central Indonesia＞

Preface
K. Wakita and C. Parkinson

Tectonic implications of new age data for the Meratus Complex of south Kalimantan, Indonesia
K. Wakita, K. Miyazaki, I. Zulkarnain, J. Sopaheluwakan and P. Sanyoto

A jadeite-quartz-glaucophane rock from Karangsambung, central Java,Indonesia
K. Miyazaki, J. Sopaheluwakan, I. Zulkarnain and K. Wakita

An outline of the petrology, structure and age of the Pompangeo Schist Complex of central Sulawesi, Indonesia
C. Parkinson

＜Comment and Reply＞

Ultrahigh-pressure metamorphism and decompressional P-T paths of eclogites and country rocks from Weihai, eastern China: Comment
M. Enami

Ultrahigh-pressure metamorphism and decompressional P-T paths of eclogites and country rocks from Weihai, eastern China: Reply
R.Y. Zhang, J.G. Liou and W.G. Ernst

＜Research Articles＞

Evolution of Cretaceous active continental margins and their correlation with other global events
N.I. Filatova

K-Ar ages of the basaltic rocks from Far East Russia: Constraints on the tectono-magmatism associated with the Japan Sea opening
S. Okamura, Y.A. Martynov, K. Furuyama and K. Nagao

Inclusion-trail geometry of albite porphyroblasts in a fold structure in the Sambagawa Belt, central Shikoku, Japan
K. Okamoto

Volume 7, Issue 3

<Thematic Section: Izu-Bonin - Mariana arc system>

Introduction to the special volume on the lzu-Bonin - Mariana arc system
R.J. Stern aud M. Arima

Late Paleocene-middle Miocene pelagic sequences in the Boso Peninsula, Japan : New light on northwest Pacific tectonics
M.M. Mohiuddin aud Y. Ogawa

Bottom-current deposits in the Miocene-Pliocene Misaki Formation, Izu forearc area, Japan
I.T. Lee aud Y. Ogawa

Arc-arc collision in the lzu collision zone, central Japan, deduced from the Ashigara Basin and adjacent Tanzawa Mountains
W. Soh, K. Nakayama and T. Kimura

Petrogenesis of the Tanzawa plutonic complex, central Japan: Exposed felsic middle crust of the lzu-Bonin - Mariana arc
S. Kawate and M. Arima

Melting experiments on hydrous low-K tholeiite: Implications for the genesis of tonalitic crust in the lzu-Bonin - Mariana arc
K. Nakajima and M. Arima

Possible Miocene rifting of the lzu-Ogasawara (Bonin) arc deduced from magnetic anomalies
T. Yamazaki aud M. Yuasa

Implications from the seismic crustal structure of the northern lzu-Bonin arc
N. Takahashi, K. Suyehiro aud M. Shinohora

Nature and growth rate of the Northern lzu-Bonin (Ogasawara) arc crust and their implications for continental crust formation
A. Taira, S. Saito, K. Aoike, S. Morita, H. Tokuyama, K. Suyehiro, N. Takahashi, M. Shinohora, S. Kiyokawa, J. Naka aud A. Klaus

K-Ar ages from seamount chains in the back-arc region of the lzu-Ogasawara arc
O. Ishizuka, K. Uto, M. Yuasa aud A.G. Hochstaedter

Submarine hydrothermal manganese deposits in the lzu-Bonin - Mariana arc : An overview
A. Usui aud G.P. Glasby

Fukutoku-oka-no-ba Volcano : A new perspective on the Alkalic Volcano Province in the lzu-Bonin - Mariana arc
C-H. Sun, R, J. Stem, T. Yoshida aud J-1. Kimura

Evidence for magna mixing in the Mariana arc system
J.K. Meen, R.J. Stern aud S.H. Bloomer

Asymmetric rifting of the northern Mariana Trough
T. Yamazaki aud F. Murakami

Noble gases in pillow basalt glasses from the northern Mariana Trough back-arc basin
Y. Ikeda, K. Nagao, R.J. Stern, M. Yuasa and S. Newman

Causes of spatial compositional variations in Mariana arc lavas : Trace element evidence
D.W. Peate and J.A. Pearce

Temporal evolution of the Mariana arc during rifting of the Mariana Trough traced through the volcaniclastic record
P.D. Clifi aud J. Lee

Segmentation of the southern Mariana back-arc spreading center
D. Stilben, T. Neumawa, N-E. Taibi aud G.P. Glasby

A bathymetric overview of the mariana forearc
R.J. Stern aud N.C. Smoot

Peridotites from the southern Mariana forearc : Heterogeneous fiuid supply in mantle wedge
Y. Ohara aud T. Ishii

Early history of the lzu-Bonin - Mariana arc system: Evidence from Belau and the Palau Trench
J.W. Hawkins and P.R. Castillo

$^{40}Ar/^{39}Ar$ and K-Ar geochronological age constraints for the inception and early evolution of the lzu-Bonin - Mariana arc system
M.A. Cosca, R.J. Arculus, J.A. Pearce aud J.G. Mitchell

Volcanoes of the southwestern extension of the active Mariana island arc : New swath mapping and geochemical studies
P. Fryer, H. Fujimoto, M. Sekine, L.E. Johnson, J. Kasahara, H. Masuda,T. Gamo, T. Ishii, M. Ariyoshi aud K. Fujioka

Volume 7, Issue 4

<Research Articles>

Phase relations and P-T conditions of the Ryoke pelitic and psammitic metamorphic rocks in the Ina district, Central Japan
T. Hokada

Paleoseismic events and the 1596 Keicho-Fushimi large earthquake produced by a slip on the Gosukebashi fault at the eastern Rokko Mountains, Japan
A. Lin, T. Maruyama, and T. Miyata

Upper Silurian-Middle Devonian radiolarian zones of the Yokokurayama and Konomori areas in the Kurosegawa Belt, Southwest Japan
M. Umeda

The 1995 Northern Niigata Earthquake with special attention to a geopressured hydrothermal system
H. Xu, Y. Oki, and T. Ito

なお，論文の投稿や雑誌の編集上のことでお聞きになりたいときは編集委員長まで，その他のいろいろな問い合わせ・ご意見・苦情等につきましては，気軽に編集事務局長までお知らせください．出張等で長期不在の場合もありますので，後者の場合は，宛先を連名でお送りくだされば幸いです．

The Island Arc編集委員長
小川勇二郎（筑波大学，電話 0298–53–4307, Fax : 51–9764, E–mail : yogawa@arsia.geo.tsukuba.ac.jp）
巽　好幸（京都大学，電話 0977–22–0713, Fax : 22–0965, E–mail : tatsumi@bep.vgs.kyoto-u.ac.jp）

The Island Arc編集事務局長
徳橋秀一（地質調査所，電話 0298–54–3676, Fax : 54–3666, E–mail : toku@gsj.go.jp）
渡部芳夫（地質調査所，電話 0298–54–3677, Fax : 54–3666, E–mail : nabe@gsj.go.jp）

名誉会員　野田光雄先生のご逝去を悼む

本学会名誉会員，九州大学名誉教授野田光雄先生は1998年10月11日午後10時，入院先の福岡県春日市の徳州会病院にて，肺炎のため91歳の生涯を終えられました．

先生は1907年10月12日，佐賀県佐賀郡川上村で，中島今朝吉様の三男としてお生まれになり，後に母方の実家，野田家を継がれました．佐賀県立小城中学校を卒業後，満州（現在の中国東北部）に渡られ，満州教育専門学校に入学，卒業後教職に就かれましたが，地質学への向学の念やみがたく，卒業後ご結婚の静子夫人とともに帰国され，東北帝国大学理学部地質学古生物学科に入学されました．1934年同大学卒業とともに再び満州に渡られ，撫順中学校に勤務されました．1938年からは満州国立中央博物館地質課長に就任され，新京工業大学教授も兼務されました．1942年末から翌年にかけ海軍省嘱託としてニューギニアの調査に参加されましたが，1944年に応召，関東軍の希元素調査隊員として資源探査に従事されました．1945年からの終戦前後の混乱のなかに，1946年になって中華民国国民政府の要請により，国立瀋陽博物院主任研究官兼国立東北大学教授として留用され，1947年9月までその研究・教育に従事されました．

帰国後は，1947年12月より福岡商工局（後の通産局）佐賀支局に勤務され，後に同支局炭業課長に任命されました．1949年九州大学における教養部発足と同時に，先生は九州大学教授に就任され，山崎光夫・林田志賀雄両先生とともに教養部地学教室の基礎づくりと発展に尽力されました．そして多くの悪条件を克服しながらスタッフと研究設備の充実に努められ，「九州大学教養部地学研究報告」の発刊を実現されました．さらに九州大学評議員ほか学内の諸委員会委員を歴任し，大学の管理・運営に大きく尽力されました．学外においては，日本地質学会評議員，同学会西日本支部長，地学教育学会幹事，福岡地学会長として学会の運営と地学の振興に努められました．また通産省鉱業審議会専門委員，福岡通産局鉱害和解仲介委員，石炭鉱業合理化事業団調査専門委員，佐賀県温泉審議会委員，北九州市立自然史博物館資料収集委員などを歴任され，地域社会や鉱業界の発展に貢献されました．1971年に九州大学を定年退官され，名誉教授になられましたが，九州大学では21年余にわたって幾多の人材の育成に尽力されました．その後，1978年まで福岡大学教授として地学などの講議を担当されました．このような先生のご功績に対して，同年11月，勲三等旭日中授章が授与されました．

先生は東北帝国大学在学中，矢部長克先生ご指導のもとに卒業論文として岩手県長坂附近の古生層を研究されましたが，その調査中に鳶森山麓の地層から，当時の日本では未発見で最古のデボン紀化石を発見されました．これは日本の地質学研究史上画期的なことであり，卒業論文研究の詳細が1934年地質学雑誌に発表されると，その論文により翌年日本地質学会賞が授与されました．その3年後，小貫義男先生による岩手県大船渡でのシルル系発見があり，さらに多くの方々の研究によって，南部北上山地は日本の古生層の標準地域の一つとされるようになりました．

大学卒業後は再び満州に戻られ，太子河，渾江，豆満江の各流域をはじめ南満州各地の上部古生界を研究され，それに関連した野外調査は北支山東省や朝鮮半島北部の炭田にも及びました．当時これらの地域の治安はきわめて悪く，野外調査には常に危険を伴っていたとのことです．これらのご研究は戦争の激化と終戦によって中断されましたが，引き揚げの際に持ち帰られた調査資料や化石をもとに研究を続けられ，多くの論文を発表されました．そのうちの「満州における石炭系および二畳系の層位学的研究」により，1950年理学博士の学位を授与されました．

帰国後の先生は，九州や四国の古生界と九州の炭田第三系の研究を精力的に進められました．古生界については，とくに九州山地北東部にシルル系が存在することを化石によって立証されると同時に，それに伴う花崗岩が再動岩体でなければならないこと，同じくそれに伴う変成岩が先カンブリア紀のものであろうことを推論されましたが，これは日本列島の地質・地史に関する画期的新知見となりました．第三系については，北部九州諸炭田の層位学的関係を論じ，かつ炭田にみられる特異な地質構造を明らかにし，炭田地質学上の問題点の解明に寄与されました．

応用地質学の分野では，佐賀県人形石山，長崎県石倉山，福岡県北九州市門司などの地すべりや北部九州諸炭田に発生した石炭鉱害などについても綿密な研究を行い，その成果をその地域に還元し，災害の予防や対策を効果的に推進し，地域の発展に大きく寄与されました．とくに1950年代の佐賀県伊万里市の地すべりの際には，先生の敏速かつ的確なご判断により適切な対策がとられたことが高く評価され，伊万里市から名誉市民の称号を受けられました．

先生は常に地質学の研究には徹底した野外調査が必要と説かれ，「地質図は足で書け」というのが持論でした．明朗闊達なお人柄でしたが，満州など外地における危険できびしい条件下での研究や生活は，奥様のご内助と先生の剛毅なご気性と実行力によって切り抜けられたと信じております．先生のご講義は定評があり，出席した学生や卒業生は「はじめて地質学は面白いものだと思った」など話していましたが，これは先生の広い学識と話術のしからしめるところにほかなりません．先生の大きなお声は，マイクなしで講義室はおろか廊下や外までよく通りました．教室内での昼の会食は先生のユーモラスなお話と明るい笑い声で和やかなものでした．またご酒を好まれ酒豪であられた先生は，興がのればねじり鉢巻で座敷の障子を大鋸代りにして，木挽唄に独特の渋い喉を聞かせて下さいました．

1960年代の終り頃から九州大学でも学園紛争が激しくなり，先生は大学の評議員として日夜ご苦労を重ねられました．そのため持病の関節リューマチがひどく悪化し，別府市の九大温泉治療学研究所に入院されたこともありました．奥様は9年前に先立たれ，その後先生は1990年末に大腸腫瘍の手術を受けられ，奇跡的に恢復されました．しかし関節リューマチや心臓のご病気のため，日常の動作がきわめてご不自由となり，車椅子などを使用しておられました．昨年お会いしたときは，ご気分もよく満州時代のお話などなさっておられましたのに，この度の突然のご逝去，まことに残念でなりません．謹んで先生のご冥福をお祈りいたします．先生のご逝去にあたり，正四位に追叙せられましたことを申し添えます．

ご遺族の清水恵子様（先生のご次女）のご住所は下記の通りです．

〒815-0033　福岡市南区大橋4-29-5　電話092-561-0198

（橋本　勇）

CALENDAR

1998, 12〜

地球科学分野に関係する研究会，学会，国際会議などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内いたします．会員の皆さまの情報をお待ちしています．
☆印は，日本地質学会主催行事．

1月 January 1999

○千葉大学国際シンポジウム「環境と地下水に関する国際シンポジウム」
12日（火）〜14日（木） 会場：千葉大学けやき会館　問い合わせ先：(事務局）千葉大学理学部地球科学科　佐倉保夫　〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33　電話 043-290-2844　Fax 043-290-2874　E-mail : ysakura@earth.s.chiba-u.ac.jp

○第2回国際土壌・地下水環境ワークショップ IWGER'99
13日（水） 制度編　14日（木） 技術編
場所：パシフィコ横浜　3階大会議室　主催：第1日　環境庁　神奈川県（制度編）第2日　（社）土壌環境センター（技術編）（「環境事業団地球環境基金」助成事業）　申し込み方法：Faxまたは郵送にて下記事務局宛お申し込み下さい．参加登録票を発送いたします　事務局：社団法人土壌環境センター担当：服部，青木　〒108-0014 東京都港区芝4-4-5　三田KMビル5F電話 03-3452-2593　Fax 03-3452-2832　申し込み締め切り：12月15日（火）（ただし，先着順で定員600人.）

○日本古生物学会1999年年会
29日（金）〜31日（日） 場所：東北大学（横浜国立大学間嶋隆一　電話045-33-9334）

3月 March

○The 1999 SME Annual Meeting &Exhibit
1〜3 Colorado Convention Center Denver, Colorado Contact: Meetings Dept., SME P.O. Box625002, Littleton, CO80162-5002（800）763-3132,（303）973-9550, Fax :（303）979-3461,E-mail : meetings@smenet.org,www.smenet.org

○国際ワークショップ「社会実験地での循環複合体のシステム構築と環境調和技術の開発」
8日（月）13 : 00-17 : 00〜9日（火）9 : 30-18 : 10 場所：大阪大学コンベンションセンター（無料） 主催：科学技術振興事業団・戦略的基礎研究推進事業・大阪大学大学院工学研究科

○第35回日本水環境学会セミナー「酸性雨問題の現状と水環境への影響」
8日（月）〜9日（火） 場所：自動車会館2階大会議室（東京都千代田区九段南4-8-13 電話 03-3264-4719）問い合わせ先：(社)日本水環境学会　セミナー係〒160-0003 東京都新宿区本塩町12　四谷ニューマンション307号　電話03-3351-2272　Fax.03-3351-2317　E-mail : jswe@mb.infoweb.ne.jp（詳細は本誌）

☆北海道支部総会ならびに例会
13（土）13 : 00-17 : 00（予定） 会場：北海道大学理学部S305教室　内容：支部総会・個人講演　問い合わせ先：坂本竜彦（大学院理学研究科地球惑星科学専攻），または塩野正道（大学院理学研究科地球惑星科学専攻）電話：011-706-2726　Fax：011-746-0394

☆日本地質学会第106年総会
26日（金）〜27日（土） 場所：早稲田大学

○日本海洋学会1999年度春季大会
27日（土）〜31日（水） 会場：東京水産大学

5月 May

○ Toward a Science of Consciousness－Fundamental Approaches－Tokyo '99（**脳と意識に関する**Tokyo '99**国際会議**）
25日（火）〜28日（金） 場所：国連大学本部（東京都渋谷区神宮前5丁目） 連絡先：〒700-8516 岡山市伊福町2-16-9　ノートルダム清心女子大学　情報理学研究所内Tokyo '99組織委員会事務局　電話086-255-5636　Fax 086-255-5090　E-mail : tokyo99@zoushoku.narc.affrc.go.jp　ホームページ　http : //www.ias.unu.edu/activities/tokyo99.htm

6月 June

○地球惑星科学関連学会1999年度合同大会
8日（火）〜11日（金） 場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

○日本情報地質学会総会・講演会 GEOINFORUM-'99
24日（木）〜25日（金） 場所：北海道大学学術交流会館

7月 July

○地学団体研究会第53回総会
30日（金）〜8月1日（日）（変更の可能性あり） 場所：信州大学教育学部（長野市）

○第36回理工学における同位元素研究発表会発表論文募集
5日（月）〜7日（水） 会場：国立教育会館（東京都千代田区霞が関3-2-3） 問い合わせ：〒113-8941　東京都文京区本駒込2-28-45　日本アイソトープ協会学術課内理工学における同位元素研究発表会運営委員会　電話 03-5395-8081　Fax 03-5395-8053 E-mail : gakujutsu@jrias.or.jp（詳細は本誌）

8月 August

○第四紀学会1999年大会
23日（月）〜25日（水）　26日（木）〜27日（巡検） 場所：京都大学

9月 September

○第8回化石クニダリア海綿国際会議
12日〜16日 場所：仙台市の仙台国際センター　連絡先並びに2nd Circular申し込み先：〒980-8578 仙台市青葉区荒巻　東北大学総合学術博物館　第8回化石クニダリア海綿国際会議組織委員会　森　啓　電話022-217-6769　Fax022-217-6631　E-mail : mori@dges.tohoku.ac.jp

○日本鉱物学会1999年度年会および総会
23日（木）〜25日（土） 場所：茨城大学

10月 October

○第7回太平洋地域新第三系国際会議
3日（日）〜6日（水） The 7th International Congress on Pacific Neogene Stratigraphy 場所：国立メキシコ大学　主催：RCPNS（太平洋地域新第三系層序委員会） 連絡先：Prof. A. Molina-Cruz, Organizing Committee of VII-RCPNS, Inst. Cien. Mar. Lim., UNAM, Ap. Post. 70-305, Ciudad Universitaria, Mexico D.F. 04510　Fax : 52-5-6160748　国内連絡先：〒422-8035　静岡市宮竹1-9-24　土研究事務所　土　隆一　電話 054-238-3240 Fax 054-238-3241 e-mail : vyz01052@nifty-serve.or.jp　会議前後にExcursionを計画，First Circularは10月に発送される予定．

☆日本地質学会第106年年会
9日（土）〜11日（月） 場所：名古屋大学

○日本火山学会1999年秋季大会
9日（土）〜11日（月） 講演会（神戸大学）
12日（火） 現地討論会（神鍋火山）

○GPS国際シンポジウム
18日（月）〜22日（金） 会場：つくば国際会議場　主催：測地学会，地震学会，火山学会ほか

11月 November

○地震学会1999年度秋季大会
17日（水）〜19日（金） 場所：仙台市

第106年学術大会（名古屋）準備委員会ニュース

1999年10月9日～11日に，名古屋大学を主会場として，第106年学術大会が開催されます．9日は名古屋市公会堂にて講演会を，10～11日は名古屋大学東山キャンパスにて一般発表を行います．より活発な議論の交わせる学術大会，より社会生活に根ざした地質学の発展をスローガンにし，名古屋大会では大会実施にあたりいくつかの点の変更を検討しています．

そのひとつとして，個人講演については，従来の口頭発表に加えて，ポスター発表で発表内容について十分議論できる環境を整えるよう準備を始めています．

また，従来にない形式の巡検コースなどの準備も進行中です．それらも決まり次第，順次準備委員会ニュースとして，お知らせする予定です．

なお，名古屋大会についての疑問や依頼がありましたら，下記までご連絡ください．

日本地質学会第106年学術大会（名古屋）準備委員会　庶務係　竹内　誠

電話052–789–2525，Fax 052–789–3033, e-mail : takeuchi@eps.nagoya-u.ac.jp

〒464–8602 名古屋市千種区不老町　名古屋大学大学院理学研究科地球惑星理学専攻

執行委員会だより

1998年度　第10回執行委員会

1998年11月16日（月）10：00～14：00に日本地質学会事務局事務局で行われ，出席者は，足立（勝）執行委員長，天野・佐々木・滝田・鳥海・高橋各執行委員，水野事務局長でした．主な報告と審議内容は以下のとおりでした．

1. 「21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム」（2000年7月開催予定）の後援依頼を承諾した．
2. 地質学論集の刊行企画案（本州弧下部地殻と酸性マグマの生成・活動システム（連絡責任者：加々美寛雄会員）が再提出され，印刷コスト低減の検討を依頼した．
3. 「預金口座振替による会費等の引き落とし払込」は，申し込みが300件程度であり，さらに広報を進めることとした．
4. 次の計7名の入会承認を行った．
   正会員4名（出口清悦・岡本　研・吉川博章・原　晴彦），院生会員1名（鵜飼宏明），学生会員2名（金子真弓・米倉栄子）．
5. 名誉会員の推薦について検討し，推薦内規に基づく3会員，支部推薦に基づく3会員，計6会員を候補者として，第3回定例評議員会に提案することとした．また，関東支部より提案のあった「名誉会員の位置付けについての基本的な考え方，名誉会員の義務・権利など，それらを踏まえて現行の推薦基準が今後も適切であるかどうか」について，会員委員会を開いて検討し，第3回定例評議員会に「名誉会員に関する検討委員会」の設置を提案することとした．
6. 本誌およびニュース誌の用紙の変更をこれまで検討してきた．今回意見交換を行い，用紙を適切に変更することとした．その結果，発送費の低減を加えて年間300万円程度の経費削減となる見込みである．
7. 第106回総会・シンポジウム（1993年3月26，27日，早稲田大学）でのシンポジウム企画案の公募に対して，計6件の申込みがあった．
8. 「事務局移転問題WG」より，14物件の現地検討などを行って，年間100万円程度の経費削減を目的とした物件の検討・選定を進めており，一方現在の事務局賃料の大幅値下げは期待できない旨の報告があった．意見交換の結果，事務局移転は不可欠であり，現在の契約条件では11月中には所有者に移転通告を行う必要があるため，執行委員長と事務局長が所有者に事前通告を兼ねた懇談を行うこととした．
9. 学術情報電子図書館サービス事業に参加するため，10月29日佐々木委員と事務局長が学術情報センターを訪問し，具体的条件などについて打合わせた．
10. 第3回定例評議員会の議事（案）について打合せた．
11. 次回執行委員会を12月12日（土）10：00～日本地質学会事務局で開催することとした．

会費払込ご案内

1999年分会費の納入期になりました．会則第6条により会費は前納することになっています．各会員宛に請求書（郵便振替用紙）をお送りしましたので，早期納入にご協力下さい．会費額は，**正会員：**10,000円，**院生会員：**8,000円，**学生会員：**5,000円です（在外会員も同様）．

自動振込ご利用の方へ

「預金口座振替依頼書・自動振込利用申込書」を提出していただき，ご協力ありがとうございました．99年分の会費から引き落としをさせていただきます．なお，この場合，事務量の軽減と簡素化ため，請求書の発行を省略させていただきますのでご了承下さい．引き落とし日は12月24日，通帳には「チシツカイヒ」（金融機関によっては短縮されることもあります）と印字されることになっていますのでご承知おき下さい．

自動振込利用申込は引き続き募集中

現在のところ，たいへん残念ながら「預金口座振替依頼書・自動振込利用申込書」は，当初の目標の16％（約300人）ほどの提出しかありません．この制度は，一人でも多くの方にご利用いただくことでメリットが生じる仕組みになっていますので，会員各位には，ぜひご理解とご協力をお願いします．今後も期日に関わらず引き続き募集を継続してまいります．書式は機会あるごとにお届けしますが，とりあえずは今年のNews誌8，9，10月号にとじ込んでありますのでご利用下さい．

（日本地質学会会計委員会）

環境地質研究委員会：書籍，論文集（郵便振替　00130−5−701805　日本地質学会環境地質研究委員会）

第1回地球環境フォーラム“環境地質学からみた地球環境の諸問題”―地球環境研究100年の系譜―（30ページ，B5判，定価1,000円，送料190円）
第2回地球環境フォーラム“地域から地球環境問題を考える”（46ページ，B5判，定価1,000円，送料270円）
第2回環境地質学シンポジウム講演論文集（336ページ，B5判，定価2,000円，送料380円）
第3回環境地質学シンポジウム講演論文集（432ページ，B5判，定価2,000円，送料380円）
第4回環境地質学シンポジウム講演論文集（392ページ，B5判，定価2,000円，送料380円）
第5回環境地質学シンポジウム論文集（446ページ，B5判，定価3,000円，送料380円）
第6回環境地質学シンポジウム論文集（422ページ，B5判，定価3,000円，送料380円）
第7回環境地質学シンポジウム論文集（432ページ，B5判，定価3,500円，送料380円）
第8回環境地質学シンポジウム論文集（368ページ，B5判，定価4,000円，送料380円）
佐藤傳蔵著“地文学”完全復刻版（185＋4ページ，B5判，定価1,000円，送料400円）
東京ガス田上の地質環境と地下開発―地下開発におけるガス問題をいかに克服するか―（70ページ，B5判，定価1,000円，送料240円）
誰がだすべきか？「地質汚染調査・対策費」を　その1　有機塩素系化合物地質汚染を例として（129ページ，＋付録38，B5判，定価1,000円，送料310円）
シンポジウム“地質汚染（その2）”（97ページ，B5判，定価1,000円，送料240円）
シンポジウム“地質汚染―水質汚濁防止法の改正を実効あるものに―”（59ページ，B5判，定価1,500円，送料240円）
シンポジウム“地質汚染―残土処理と地質環境”（91ページ，B5判，定価1,500円，送料240円）
シンポジウム“地質汚染―地球環境の持続的開発と廃棄物最終処分場の閉鎖条件について”（46ページ，B5判，定価1,500円，送料200円）
国際シンポジウム“環境保全と鉱物資源の活用”（84ページ，A4判，定価2,000円，送料390円）

日本地質学会　*News Contents*

Vol. 1, No. 1－12, 1998

Contents	No.	Page
新春特集		
座談会「これからの地質学会」	1	2–5
会長　秋山雅彦・副会長　小松正幸・副会長　坂　幸恭		
わが国の地質学の将来を考える：実益地質学のすすめ	1	6–7
石原舜三		
各界の声：地質学と私	1	8–10
小学校理科教育と地質学　阿部国広，高校で地学を教えて		
小林和宏　東京港と地質学　清水惠助，博物館と地質学，		
那須孝悌，日本地質学会と地質学の普及　羽田　忍，		
生涯学習と地質学　神戸信和		
The Geological Society of Korea : Jeong Hwan Kim	1	11
(President of the Geological Society of Korea)；韓国地質		
学会長Jeong Hwan Kim（金貞煥）教授をお迎えして		
岡田博有		
東京都（区部）大深度地下地盤図－東京都地質図集6－	1	12–13
日本地質学会第104年年会記事	1	16–32
1998年度役員選挙（会長・副会長・評議員）のお知らせ	1	巻末
日本地質学会第105年総会・シンポジウム開催予告（追加）	1	巻末
Q＆A法人化（4）	1	巻末
	1	巻末
ロンドン地質学会の動向　植村　武	2	2
執行体制整備委員会報告（中間答申について）	2	3–5
執行体制検討委員会委員長　小松正幸		
日本地質学会の財政状況に関心を（その2）	2	6–9
－97年度決算（案）と98年度予算（案）報告と会計上の		
問題点－　会計委員会		
掲示板：中央構造線「月出露頭」のアクセス紹介	2	9
諏訪兼位・大岩義治		
OD21, IODP, CONCORDについて　木下　肇	2	12
韓国地質学関連学会連合英文誌“Geoscience Journal”の	2	15
創刊　岡田博有		
学会記事（1997年度第3回定例評議員会抄録）	2	36–43
日本地質学会ホームページ開設のお知らせ	2	45
法人化Q＆A（5）	2	巻末
日本地質学会第105年総会・シンポジウムプログラム	2	巻末
第一次地質基準案（中間報告）	3	2–10
第一次地質基準策定委員会		
選挙委員会報告	3	27
執行体制の整備について　1997年度評議員会議長	4	2–6
1997年度評議員会議長　斎藤常正		
学会の財政問題についてご意見を　日本地質学会の財政	4	7–9
改善について（答申）　1997年度財政問題検討委員会		
松本大会：行事委員会からのお知らせ（個人講演の実施方	4	10–12
法に変更あり，要注意！）/第105年学術大会（松本）		
の予告とご案内		
学会だより：教育課程審議会の中間報告まとめへの意見書	4	29
堀川秀夫		
学会記事	4	30–39
1997年度第4回定例評議員会議事抄録/1998年度第1回		
定例評議委員会議事抄録/ 運営細則の一部改正と新しい		
内規の策定に関するお知らせ/委員会新設のお知らせ		
1998年度日本地質学会会長・副会長および評議員	4	42
日本地質学会第105年年会予告　松本大会	5	2–15
会期1998年9月25日～27日		
野外調査でのエキノコックス感染にご注意を！－かわいい	5	16–17
キツネと犬が媒介する恐い寄生虫　三田直樹		
学会だより：「地質学関連の国立研究機関の組織・調査研	5	29–30
究活動の強化に関する要望書」と「岡山県阿哲郡大佐町		
の2つの露頭の保全に関する要望書」提出について		
1998年度新役員紹介	5	36–37
日本地質学会国際賞W. G. Ernst教授に	6	2–3
日本地質学会国際賞の授与について　秋山雅彦		
土石流：ボブスレー方式の流下について　茅原一也	6	6–7
論文の寿命　加藤碩一	6	8–9
伊能忠敬展見学会　鈴木尉元	6	9
Acceptance of the Geological Society of Japan by W. G.		
Ernst, Stanford University		
1999年度「日本地質学会賞」候補者募集について	6	32/7　20
1998年度版会員名簿作成についてのお願い	6	33/7　21
日本地質学会の将来構想，組織・運営改善に関する討議経	7	2–5
過　小松正幸		
久城育夫教授ロンドン地質学会名誉会員に推挙される/地	7	21
質図幅の研究で滝沢文教会員が工業技術院長賞を受賞		
日本地質学会第105年総会	7	34–41
会費の「口座引落」方式の導入について	7	45
（お知らせとお願い）		
日本地質学会第105年年会プログラム	8	巻頭
日本地質学会の危機的財政状況	8	2
財政問題検討委員会報告		
日本地質学会国際賞の英文名称の募集	8	2–3
各賞問題検討委員会		
第106年（1999年）総会でのシンポジウム企画の募集	8	3
行事委員会		
INHIGEOと日本の地質学史研究組織　今井　功	8	4–5
巨大ザメ・メガロドンはヒトと遭遇したか？	8	6–7
－NHKスペシャル「海～知られざる世界」を観て－		
兼子尚知・矢部英生・後藤仁敏		
大分地質学会の紹介	8	11
会員の「口座引落」方式導入による「預金口座振替依頼申	8	巻末
込書」のご提出について（お願い）		
学会記事　1998年度第2回定例評議員会議事抄録	9	14–23
日本地質学会元会長有志の「学会運営についての要望書」	9	24–25
と藤田至則会員の「評議員会（秋山・斎藤両会員による）		
回答に対する批判と要望」と，その回答		
会費の「口座引落」方式導入による「預金口座振替依頼申		
込書」のご提出について（お願い）	9	巻末/10　巻末
財政問題検討委員会中間報告	10	2–3
財政問題検討委員会委員長　上砂正一		
組織運営検討委員会の検討状況について	10	4–5
組織運営検討委員会委員長　徳岡隆夫		
バングラデシュでの地下水ヒ素汚染解明に取り組んで	10	9–10
応用地質研究会ヒ素汚染研究グループ		

1999年の院生・学生会員の申請をお願いします　10　33
財政問題検討委員会アンケート用紙　10　巻末
「預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書」　10　巻末

1999年度日本地質学会評議員候補者の推薦について　11　巻頭
日本地質学会選挙委員会
会費払込のお願い/1999年の院生・学生会員の申請をお願いします
ロンドン地質学会改革の進展 小松正幸　11　2–4
松本大会行事委員会報告　11　5–6
行事委員長　磯﨑行雄
日本地質学会第106年総会・シンポジウム開催予告　11　6
学会記事：1998年度臨時評議員会議事抄録　11　19–20

1999年地球惑星科学関連学会合同大会　12　13–15
日本地質学会ニュース　Vol. 1, No. 1–12　1998総目次　12　巻末

博物館だより

2　18/4　14/5　17/7　8–9/8　10/10　8/12　4

博物館紹介

⑧　千葉県立中央博物館　熊代(岡崎)浩子　2　16–17
⑨　北九州市立自然史博物館　藤井厚志　3　12–13
⑩　信州新町化石博物館　成田　健　5　18–19
⑪　七宗町　日本最古の石博物館　河尻清和　6　4–5
野外博物館としてのフォッサマグナパーク　7　6–7
⑫　宮崎県総合博物館　伊東嘉宏　8　8–9
⑬　横倉山自然の森博物館　安井敏夫　10　6–7
⑭　穂別町立博物館　櫻井和彦　11　8–9
⑮　大鹿村中央構造線博物館　河本和朗　12　2–3

ホームページの紹介

⑧スミソニアン自然史博物館のホームページ　中田節也　2　19
⑨　海洋科学掘削計画（Ocean Drilling Program）のホームページ　中田節也　5　20

地学英語雑感 嶋﨑吉彦

①　はじめに　2　26
②　国連の英語　3　14
③　良いセンテンスをつくる－1　5　22
④　良いセンテンスをつくる－2　6　10
⑤　良いセンテンスをつくる－3　7　5
⑥　良いセンテンスをつくる－4　8　12
⑦　良いセンテンスをつくる－5　9　3
⑧　良いセンテンスをつくる－6　10　10
⑨　パラフラフについて　11　7
⑩　略語について　12　6

賛助会員のページ

株式会社大和地質研究所・秩父小野田セメント株式会　2　10–11
株式会社アイ・エヌ・エー　3　11
ジャパンエナジー石油開発株式会社　4　13
川崎地質株式会社　5　21
ジオテック株式会社　6　11
応用地質株式会社　7　10
株式会社ダイヤコンサルタント　12　5

学協会・研究会報告

IGCP350野外討論会報告：デカン高原中西部の白亜紀堆積盆　坂井　卓　2　13–14
大島シュードタキライト巡検，シンポジウム「断層震源域の物質イメージング」報告　4　15
トルコ，北アナトリア断層（NAF）巡検と国際シンポジウム“Recent Developments on Active Fault Studies”参加報告　安間　了・須貝俊彦・粟田泰夫・坂　幸恭/15th International Sedimentological Congress in Alicante参加報告レポート　小松原純子　7　11–14
国際オフィオライト会議98（オウル大学・フィンランド地質調査書共催）報告　石渡　明・中川　充　9　2
IMAに参加して　田崎和江・四ヶ浦　弘・大野源広・鈴木七重・上島雅人・安多　剛/第6回国際古海洋学会議（ICP6：リスボン）の報告　岡田尚武/第1回日韓構造地質合同学会報告　小嶋　智/ペンローズコンファレンス「オフィライトと海洋地殻（Ophilites and oceanic crust)」出席報告　小川勇二郎・石井輝秋　10　11–14
IGCP–368（東ゴンドワナの原生代事件）International Field Workshop「The Mozambique belt of Southeast Africa」参加報告　加納　隆　11　10–11
Gondowana-10（第10回国際ゴンドワナ会議）参加報告　吉倉紳一・吉田　勝/アメリカ地質学会1998年総会（トロント）に参加して　山岸宏光/ブルース・チャペル退官記念討論会On the Bruce Chapell Symposium　石原舜三　12　7–9

紹　介

新版地質図・報告書類［20万分の1地質図幅「宮崎」］　1　14
Gondwana Research誌　創刊号/日本地質図大系（全8巻）　2　20–22
—第1巻—日本の地質総図/宇井忠英編：火山噴火と災害　J. アンドリューズ・P. ブリンブルコム・T. ジッケルズ・P.リス著　渡辺　正訳：地球環境化学入門/日本の土地研究会：あなたの土地は安全か/Harsono Pringgoprawiro, Darwin Kadar, Stanislaw K.Foraminfera in Indonesian Stratigraphy. 1998./信濃毎日新聞社編集局編：信州の活断層を歩く/都城秋穂：科学革命とは何か　3　15–19
フリチョフ・ナンセン著，太田昌秀訳：「フラム号」北極海横断記—北の果て/狩野謙一・村田明広著：構造地質学/地質学論集第47号「日高地殻—マントル系のマグマ活動」/新編島根県地質図（20万分の1）　4　16–18
周藤賢治・牛来正夫著：地殻・マントル構成物質　5　23
Thinking about the Earth : A History of Ideas in Geology by David Oldroyd/The Pleistocene Boundary and the Beginning of the Quaternary by J. A. Van Couvering/スティーヴン・シュナイダー著，田中正之訳：地球温暖化で何が起こるか　6　12–14
楡井　久監修：検証・房総の地震/樋口　雄著：石油の謎を探る　7　15–16
井尻正二・真野勝友・堀田　進：新・文明のなかの未開レリックの世界　8　13
相馬恒雄：富山のジオロジー—富山の大地の成り立ちを探る—（とやまライブラリー5）/町田　洋・白尾元理：写真でみる火山の自然史/A. A. メイヤーホフほか　西村敬一・小玉喜三郎・矢野孝雄・小室裕明訳：サージテクトニクス　地球ダイナミクスの新仮説/新潟大学重油流出による海の汚染調査グループ：1997年1月ナホトカ号重油流出事故による新潟県下の重油漂着状況と環境汚染—　9　4–6

調査研究報告書―（1998年3月）（寄贈本・紹介依頼本）
島崎光夫：離島佐渡―その過去・現在・近未来/金子史朗：科学が明かす古代文明の謎/寄贈本・紹介依頼本 10 15
田口一雄：石油の成因―起源・移動・集積/日本応用地質学会　関西支部＋関西地質調査業協会（共編）：丘陵地の地盤環境（寄贈本・紹介依頼本） 11 11–12
（寄贈本・紹介依頼本） 12 9

ご案内

Methane Hydrates Potential Resources in the near Future?/第33回日本水環境学会セミナー「生き物から水環境をみる（II）」/―科学者フォーラム―第5回アジア会議「アジアにおける学術の直面する課題―持続可能な発展に向けて―」―/日仏KAIKO–TOKAI国際シンポジウムのご案内 2 22–24
地質学史懇話会のお知らせ/第16回化石研究会総会のお知らせ 3 19
第7回地学教育セミナーのご案内―気候変動―過去・現在・未来―/第7回日本第四紀学会テフラ研究委員会北部フォッサマ野外巡検のお知らせ/女子学生と工業技術院研究者との懇親会のお知らせ/地学団体研究会東京支部神奈川班第2回総会のお知らせ/サザンアップランズテレーン（カレドニア造山帯におけるテクトニクスおよび生層序学）コンファレンスのお知らせ 4 19–20
IGCP 350 " Cretaceous Environmental Change in E & Asia ": Final International Symposium and Field Meeting/バイカル湖研究に関する国際シンポジウム開催/INTERNATIONAL SYMPOSIUM :『The Ryukyu Islands : the area of adaptive radiation and extinction of island fauna』国際シンポジウム『琉球列島（南西諸島）―島嶼型動物相の適応放散と絶滅の舞台―』/第5回テチス浅海域に関する国際シンポジウム2nd Circular配布のご案内/モンゴルで開催された「1998年生層序学会議」について 5 23–26
堆積環境と堆積過程に関する講演会のお知らせ/第14回ゼオライト研究発表会/ 地球惑星科学関連学会連絡会ニュースNo. 15（1998年6月）お知らせ: 地球惑星科学関連学会1999年合同大会のセッションシンポジウム提案の一般公募について/Special Field Excursion : Mesozoic Red Beds of Northeasat Thailand (IGCP350: Cretaceus Environmental Change in E & S Asia) 6 14–20
最近地質図発表会と夏休み地球なんでも相談/第6回日本水環境学会市民セミナーのご案内「いま水環境に知りたいこと」―水環境をめぐる新たな問題とその対策/第1回日本水環境学会シンポジウム参加案内/第1回「Newtonサイエンスセミナー」/第48回東レ科学振興会科学講演会のご案内/第42回粘土科学討論会/東海地震防災セミナー1998のお知らせ［第15回］/第1回CEReS環境リモートセンシングシンポジウム/国際オフィオライト・シンポジウム 7 16–18
平成10年度「深田研談話会」/第17回日本自然災害学会学術講演会および第35回自然災害科学総合シンポジウム/日本地熱学会20周年記念シンポジウム/平成9年度地方自治体活断層調査報告会 8 14–15
公開シンポジウム「日産財団　知の協演シンポジウム」「―水惑星地球の未来Ⅰ―」/「都市地震防災地盤図」に関するシンポジウム/教科「理科」関連学会協議会第3回シンポジウム「これからの理科教育に求めるもの」/「アジアにおける陸と海のリンク」物質輸送と地層形成に関する国際ワークショップのお知らせ/金沢大学創立50周年記念国際シンポジウム「地球―水―人間」/資料：第24回海洋地名打合会で決定された海底地形名 9 6–9
「急激な気候変動・モンスーン変動・ダスト変動の謎を解く」/アジア地下水砒素汚染フォーラム―バングラデッシュの被害報告と国際協力のあり方―/第3回アジア地下水砒素汚染フォーラム・in宮崎―テーマ：「地下水と砒素汚染の現状，原因およびその対策」/第111回化石研究会例会のお知らせ/UNESCO-IUGS共同研究事業・IGCP (国際地質対比計画) シンポジウム「文化遺産と災害」/科学技術者100万人集会：第8回「基礎研究の復興と科学技術教育」シンポジウム―経済構造改革と国際的エンジニア養成(PartII)―/千葉大学国際シンポジウムの開催のお知らせ「環境と地下水に関する国際シンポジウム 10 16–18
第2回国際土壌・地下水環境ワークショップ/第8回化石クニダリア海綿国際会議の御案内 11 12–13
第35回日本水環境学会セミナーのご案内「酸性雨問題の現状と水環境への影響」/Toward a Science of Consiousness―Fundamental Aproaches―（脳と知識に関するTokyo'99国際会議）/第36回理工学における同位元素研究発表会発表論文募集/2003年，国際レルゾライト会議を日本で―ホームページ公開のお知らせ―/「第40回科学技術映像祭」学術研究部門　参加作品募集 12 10–11

各賞・研究助成

第29回（平成10年度）三菱財団自然科学研究助成 1 14–15
財団法人神奈川科学技術アカデミー研究助成募集のご案内（第1段階） 2 23–24
1998年地球化学研究協会学術賞「三宅賞」の受賞候補者および研究助成候補者の推薦 3 20
平成10年度日本生命財団研究助成「人間活動と環境保全との調和に関する研究―自然と人間の共生への新しい道を求めて」/トヨタ財団1998（平成10）年度研究助成応募について 4 21
第25回日産学術研究助成候補者推薦のお知らせ/平成10年度東レ科学技術賞および東レ科学技術研究助成候補者推薦/1999年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者および研究助成候補者の推薦依頼のお知らせ/ASTER (Advanced Spaceborne Thermal Emission and Reflection Radiometer) Announcement of Opportunity研究公募（正式募集開始のお知らせ） 6 16–17
平成10年度（第20回）沖縄研究奨励賞候補者推薦応募について/「朝日賞」候補者推薦のお知らせ 7 18–19
平成11年度笹川科学研究助成 8 15
第1回大学婦人協会守田科学研究奨励賞受賞候補者募集要項 9 9
平成11年度全国発明表彰における候補者の推薦について 10 18

公　募

新潟大学積雪地域災害研究センターの教官/熊本大学理学部地球科学科の教官/兵庫教育大学学校教育学部自然系教育講座（地学）の教官 1 15
筑波大学地球科学系教官の公募/九州大学理学部地球惑星科学科岩石反応循環科学講座所属助教授の公募/九州大学理学部地球惑星科学科海洋底地球科学講座所属助教授の公募/熊本大学理学部環境理学科の教官公募 2 24–25
島根大学総合理工学部地球資源環境学科の教官公募 3 20
林原自然科学博物館準備室の研究スタッフ募集のお知らせ 4 21
大阪工業大学教官公募/通商産業省工業技術院研究職選考 5 25–26

採用者の公募について/東京大学大学院理学系研究科球惑星物理学専攻教官公募
金沢大学理学部地球科学科教官の公募について 6 17–18
東京大学大学院理学系研究科地質学専攻教官の公募 7 19
新潟大学理学部自然環境科学科の教員公募 8 15
神戸大学内海域機能教育センターの教官公募 9 9
公募結果/ 和歌山大学教育学部の教官の公募について 10 18–19
公募結果/ 東京大学地震研究所の教官の公募について/平成11年度京都大学防災研究所共同研究の公募/1999年スミソニアン・フェローシップの募集 11 13
訂正/愛媛大学理学部教官の公募について/東京大学地震研究所の教官の公募について/東京大学大学院理学系研究科地球惑星物理学専攻教官公募のお知らせ/大阪市職員（学芸員）募集要綱 12 11–12

委員会報告

第17期第1 回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会議事録/構造地質研究会97年冬の例会報告 2 25–26
日本学術会議第17期第1回鉱床学専門委員会議事録/地質科学総合研究連絡委員会（第17期・第1回）議事録 3 20–21
日本学術会議第17期第2回鉱床学専門委員会議事録 5 26
IGCPニュース1998/第17期第2地球化学・宇宙化学研究連絡委員会議事録（案） 6 18–20
地質学史懇話会第13回例会報告/日本学術会議第17期第3回鉱床学専門委員会議事録 7 19–20
IUGSの白亜系層序学小委員会委員について/第17期第3回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会議事要録 10 19–20
1998年IGC理事会報告 11 14

委員会だより

「地質学と地震」研究委員会報告/環境地質研究委員会報告 2 27–32
合同大会での保育室設置のお知らせ（女性科学者の未来を考える研究会） 4 20
女性地球科学者の未来を考える研究委員会「八甲田集会のお知らせ」 5 31
地質学普及教育実行委員会「科学技術館主催の科学の祭典に参加」/環境地質研究委員会「第8回環境地質学シンポジウムの開催と講演論文募集のお知らせ」「国際シンポジウム“環境保全と鉱物資源のお知らせ」/女性科学者の未来を考える研究委員会「地球惑星科学関連学会1998年合同大会に初の保育室」 6 24–27
環境地質研究委員会「第8回環境地質学シンポジウムの開催と講演論文募集のお知らせ」「国際シンポジウム“環境保全と鉱物資源の活用”の開催のお知らせ」/女性科学者の未来を考える研究委員会「八甲田集会」 7 25–27
科研費問題検討小委員会：科研費申請有資格者会員の皆さまへ　文部省科研費補助金の申請について 9 11
環境地質研究委員会：第8回環境地質学シンポジウム 10 21–22
第106年学術大会（名古屋）準備委員会ニュース 12 23

専門部会コーナー

層序部会/地域地質専門部会 2 33
構造地質部会：構造地質研究会第1回日韓合同大会のお知らせ 5 31
情報地質部会 7 28
構造地質部会：Journal of Structural Geology の日本地質学会・会員の個人特別講読 9 11
環境地質部会/岩石部会 10 22
火山部会：1998松本大会議事録/岩石部会：松本大会　ランチョンの報告/情報地質部会：松本大会　ランチョン報告 11 15–16
構造地質部会：日韓構造地質研究会第2回合同大会のお知らせ　The 2nd. Joint Meeting of Korean and Japanese Structure and Tectonic Research Group 1st. circular 12 16

院生コーナー

院生コーナー開設のお知らせ：若手研究者のネットワーク作りを 5 32
研究室・セミナー紹介 No. 1　東京大学理学系研究科地質学教室構造地質セミナー/海外学会・フィールド報告 第13回 Himalaya–Karakoram–Tibet International Workshop に参加して 7 29–31
夜間小集会に参加しよう！/ 研究室・セミナー紹介 No. 2 早稲田大学教育学部地学専修高木研究室/アメリカ大学院留学報告－from Penn State　圓入敦仁 8 17–18
南アフリカ＆レソト王国紀行　阿部なつ江 9 12–13
研究室紹介 No. 3　新潟大学岩石セミナー＆構造セミナー 10 23
アンケートに答えて下さい（12月10日まで）/研究室紹介 No. 4　大阪市立大学理学研究科地球史研究室 11 17–18
研究室紹介　No.5　金沢大学理学部地球学教室石渡研究室/アメリカの大学院に入学するまでfrom Penn State（2）圓入敦仁 12 17–18

支部コーナー

関東支部：第9 回地質汚染（土壌を含めた地層汚染・地下空気汚染・地下水汚染）技術研修会報告 2 34
北海道支部：講演会のお知らせ「札幌の地震を考える―地質学と地震学からのアプローチ―」/関東支部：総会と講演会のお知らせ，巡検のご案内“大磯国府津・松田断層をみる”
西日本支部：1997年度総会および第136回例会
北海道支部：1997年度総会・例会の報告/関東支部：総会と講演会のお知らせ，巡検“大磯丘陵の火山灰をみる”のご案内（続報）/関西支部：1997年度関西支部例会の報告 4 24–26
北海道支部：地質見学会「蝦夷層群の堆積相」のお知らせ/「札幌の地震を考える―地質学と地震学からのアプローチ―」講演会報告 6 28
関東支部ご案内：第10回地質汚染技術研修会のお知らせ（第1報）報告；講演会「環境と防災」および1998年関東支部総会報告；「第6回大磯火山灰巡検」 7 32–33
関東支部：第10回地質汚染（土壌を含めた地層汚染・地下空気汚染・地下水汚染）技術研修会のお知らせ（第2報）/第4回シーケンス層序学巡検―古東京湾の堆積物をみる―および町民公開講座（予定）―霞ヶ浦・北浦周辺の自然環境―/「現代の貝塚」中止のお知らせ/他支部のお知らせ 8 19–20
関東支部：第10回地質汚染（土壌を含めた地層汚染・地下空気汚染・地下水汚染）技術研修会のお知らせ（第2報再掲） 9 13
北海道支部：「蝦夷累層群の堆積相」見学会報告/関東支部巡検案内（続報）：第4回シーケンス層序学巡検案内（続報）―古東京湾の堆積物をみる―および町民公開講座（予定）―霞ヶ浦・北浦周辺の自然環境―/関西支部：1998年度総会・講演会・シンポジウム開く/関西支部・西日本支部：合同支部例会のお知らせ/「西日本の 10 24–27

地質めぐり」CD–ROMについて
東北支部：総会，火山・地震学術シンポジウム［岩手山の火山活動と防災」岩手ネットワークシステム「地盤と防災研究会」と共催 11 16
北海道支部：日本地質学会北海道支部総会ならびに例会の御案内 12 18

会員の声

周藤賢治 2 35
倉林三郎・金井克明・斉藤尚人・堀口萬吉・保科　裕・松本俊幸・吉田　尚 4 27–29
藤田至則
秋山雅彦・斎藤常正
端山好和 6 31
倉林三郎 7 14

関連学協会コーナー

日本古生物学会行事予定 5 32
資源地質学会行事予定 6 29
日本第四紀学会の紹介と行事予定 10 28–29

執行委員会だより

2 44/3 28/4 43/5 38/6 32/7 44/8 20/10 29/11 20/12 23

評議員会の開催お知らせ

2 44/4 42/5 38/7 44/8 20/11 20

追悼・訃報

中川衷三先生のご逝去を悼む　岩崎正夫 3 25
秦　光男さんのご逝去を悼む　山口昇一 5 33
小野晃司先生のご逝去を悼む　渡辺一徳 7 42
渡辺文平さんを悼む　纐纈二三雄 9 26
野村松光会員を偲んで　後藤仁敏・平野弘道 10 30
名誉会員　野田光雄先生のご逝去を悼む　橋本　勇 12 21
訃報 5 33/8 15

カレンダー

1 34/ 3 24/ 4 40/ 5 34/ 8 22/ 9 27/ 10 31/ 11 22/ 12 22

The Island Arcだより

1 33/ 2 46/ 3 26–27/ 4 41/ 5 35/ 6 30–31/ 7 43/ 8 21/ 9 28/ 10 32–34/ 11 21/ 12 19–20

編集後記

1 13/ 2 45/ 4 43/第1回ニュース誌編集委員会報告 7 31

お詫びと訂正　補足

2 45/9 9

書籍・出版案内

地質学論集新刊案内　第49号「21世紀を担う地質学」/第51号「地震と地盤災害―1995年兵庫県南部地震の教訓」 4 22–23/5 27–28
地質学論集　近刊案内　第50号「構造地質　特別号―21世紀の構造地質学にむけて―/第49号「21世紀を担う地質学」/第51号「地震と地盤災害―兵庫県南部地震の教訓―」 6 21–23/7 22–24
地質学論集　近刊案内　第50号「構造地質　特別号―21世紀の構造地質学にむけて―」 8 16/9 10
リーフレットシリーズ第2作「大地の痛みを感じよう―Geo-Pollutions」 11 7
環境地質研究委員会：書籍・論文集 12 24
出版物在庫案内 11 23
取扱い地質図一覧 12 巻末

表紙写真・解説

第1号：新潟県糸魚川市の沖合約5kmの日本海上空（高度3,700m）からの鳥瞰　写真：㈱ナカノアイシステム　解説：宮島　宏
第2号：東南極ナピア岩体・リーセルラルセン山地域に分布するサフィリン＋石英＋斜方輝石の鉱物組み合わせを持つ変成岩の露頭　石塚英男
第3号：富士川河口：プレート境界の上陸地点　新妻信明
第4号：秋田駒ヶ岳1970–71年噴火の溶岩流　千葉達朗
第5号：スイスアルプス，グラールスの押し被せ断層　高木秀雄
第6号：ブラジル，ロンドニア地方のラパキビ花崗岩　石原舜三
第7号：チベット高原，ラサ・羊八井間に露出する後期白亜系の陸成層と古第三系の陸上噴出火山岩類　高橋正樹
第8号：新潟県間瀬産魚眼石および方沸石　豊　遙秋
第9号：ケニア・リフト北部，リフトフロアに見られる火山灰丘，溶岩とそれらを切る断層　沢田順弘
第10号：グリーンランド東南部の海岸に見られる第三紀の玄武岩質マグマの貫入分化岩体　写真：Dennis, K. Bird　解説：丸山茂徳
第11号：その後の雲仙普賢岳　中田節也
第12号：エトナ火山　バレ・デレ・ボーベ馬蹄形凹地と1991～93年溶岩流　白尾元理

ご執筆いただいた方々，および発行に際しご協力下さった多くの方々に，誌上にて恐縮ですが深く感謝申し上げます．

（ニュース誌編集委員会）

取扱い地質図一覧（委託販売）

1998/11/1 現在

100 万分の 1 日本地質図　第 3 版　4 枚組　¥6,000
　　〃　　＊CD-ROM　¥5,900
地球化学アトラス—北関東—　¥5,300
200 万分の 1 地質編集図
22　コンピュータ編集による日本地質図（付記付き）　¥2,200
23　日本の磁気図（付記付き）　¥2,400
特殊地質図
21-5　仙岩地域中心部地熱地質図 1：5 万（説付き）　¥3,700
30　札幌及び周辺部地盤地質図 1：3 万（説付き）　¥4,000
20　東京湾とその周辺の地質　¥5,900
31-2　秋田地熱資源図　¥4,800
50 万分の 1 地質図幅
3　旭川　¥2,000
50 万分の 1 活構造図
＊8　東京（第 2 版）　¥3,100
2.5 万分の 1 地質構造図
7　阿寺断層系ストリップマップ　¥2,800
8　中央構造線活断層系（四国地域）ストリップマップ　¥4,300
9　中央構造線活断層系（近畿地域）ストリップマップ　¥2,300
10　柳ヶ瀬-養老断層系ストリップマップ　¥2,400
11　糸魚川-静岡構造線活断層系ストリップマップ　¥2,400
20 万分の 1 地質図幅
夕張岳　¥2,400，名寄　¥2,200，岩内　¥2,300，青森　¥2,200，八戸　¥2,200，相川及び長岡の一部　¥1,700，高田　¥2,600，宇都宮　¥2,600，八丈島　¥1,300，飯田（第 2 版）¥2,300，富山　¥2,300，岐阜　¥2,600，木本　¥1,300，高梁　¥2,400，徳島　¥2,000，宇和島　¥2,000，厳原　¥1,300，福岡　¥2,400，＊鹿児島　¥2,400，＊宮崎　¥2,500，唐津　¥2,100，奄美大島　¥1,800，久米島　¥1,800，＊長野　¥2,900，＊和歌山　¥2,500
日本地質図索引図　第 6 集（1985-1989）　¥6,700
地質図目録図（1995 年）　¥500
日本地質文献目録（GEOLIS）
1988 年　¥3,100，1989 年　¥3,500，1991 年　¥4,900
1992 年　¥5,500
海洋地質図
35　鳥取沖海底地質図 1：20 万（説付き）　¥3,800
36　鳥取沖表層堆積図 1：23 万（　〃　）　¥3,100
37　室戸沖表層堆積図 1：20 万（説付き）　¥2,700
38　経ケ岬沖表層堆積図 1：20 万（　〃　）　¥2,900
39　下北半島沖海底地質図 1：20 万（　〃　）　¥3,200
40　経ケ崎岬海底地質図 1：20 万（　〃　）　¥3,400
＊47　粟島周辺海底地質図（説付き）　¥5,200
＊48　秋田西方海底地質図（　〃　）　¥5,300
重力図
1　青森地域重力図（ブーゲー異常）第 2 刷 1：20 万　¥2,100
2　秋田地域重力図（ブーゲー異常）1：20 万　¥1,400
3　山形地域重力図（ブーゲー異常）1：20 万　¥1,400
7　北上地域重力図　¥2,300
＊ 8　渡島地域重力図　¥1,700
＊ 9　苫小牧　¥1,500
＊10　札幌　¥1,700
火山地質図
浅間火山　1：5 万　¥1,700，＊那須火山　¥2,100，青ヶ島火山および伊豆諸島南方海底火山地質図 1：1 万　¥2,500，雲仙火山地質図　¥1,100　＊伊豆大島　¥1,700　＊阿蘇（第 3 版）　¥1,100
地域地質研究報告　地質図 1：5 万及び説明書
糠内　¥2,800，松前　¥2,700，黒石　¥3,400，鳥海山及び吹浦　¥3,500，刈和野　¥2,400，登米　¥3,100，大須　¥2,400，若松　¥2,600，原町及び大甕　¥3,900，長岡　¥4,000，八海山　¥2,700，苗場山　¥2,700，出雲崎　¥3,200，浪江及び磐城富岡　¥3,300，高田東部　¥2,900，中野　¥2,500，寄居　¥3,000，清水　¥2,700，那古　¥1,800，上高地　¥3,500，谷汲　¥2,400，槍ヶ岳　¥2,900，金山　¥3,100，下呂　¥2,700，四ツ谷　¥2,500，福知山　¥3,200，篠山　¥2,900，園部　¥2,900，桑名　¥3,200，今市（島根県）　¥2,900，赤名　¥2,700，明石　¥2,400，和歌山及び尾崎　¥2,300，松江　¥3,300，広島　¥1,500，洲本　¥2,600，折尾　¥3,000，福岡　¥3,700，佐賀関　¥2,600，豊岡　¥2,400，犬飼　¥3,400，小値賀島及び肥前平島　¥2,400，三重町　¥3,200，佐伯　¥3,000，尾鈴山　¥3,500，神浦　¥2,800，末吉　¥3,100，湯湾　¥3,200，乗鞍岳　¥3,200，北条　¥4,000，津西部　¥4,100，広根　¥3,500，福江　¥2,600，二本松　¥2,900，恵比島　¥2,800，美濃　¥2,400．大阪西北部　¥2,400，大阪西南部　¥2,400，神戸　¥3,100，＊須磨（2 刷）　¥2,400，岸和田　¥3,700，志津川　¥4,100，相馬中村　¥5,100，真壁　¥3,600，高遠　4,200，＊上野　¥4,000，飯豊山　¥3,000，椎葉村　¥4,300，柿崎　¥3,300，＊岩ヶ崎　¥4,300，＊大分　¥3,800，＊倉橋島及び桂島　¥2,900，＊姫島　¥2,600，＊宮原　¥4,500，＊姉崎（2 刷）　¥3,400，＊四日市（2 刷）　¥2,700，＊石見大田・大浦　¥3,800，＊大阪東南部　¥3,400，＊京都東北部　¥3,700，＊熊川　¥3,600，＊熊田　¥3,300，＊小倉　¥3,700，＊玉庭　¥4,300，＊名張　¥3,200，＊横須賀　¥2,700，＊秋田（2 刷）　¥1,800，＊伊東（3 刷　説明書なし）　¥900

＊会員には定価の 1 割引きで，代金後払いで注文をお受けいたします．なお，委託販売につき 5% の消費税をいただきます．ご注文は電話か Fax にて（なるべく Fax で），地質学会事務局へお申込み下さい．＊印のついたのは新刊および新扱いです
電話　03-3252-7242，Fax.　03-5256-5676